74/40

緒言

今や政事文學教育を問はず新聞雜誌の數實に枚舉に遑あらず豈盛かりと云はざる可けんや而して此等文壇の上將軍か或は偶ま論鋒を誤つて鉄窓城下に擒となり或は孤笻軍に投じて吶喊聲裡に一枝を弄し或は萬里の怒濤を衝て遠く龍動の月を探り或は文海に棹して優に一体の文章を瓶むる等多々艱難經歷したる事實を公にするは必

す無益の勞は非さるなり

一本書は書中の名家は一々直話を遂け細大之を筆はしたる者かれは彼在來の評判記樣の所謂列傳かる者とは雲泥月鼈の徑庭あるを信す

一中は全体の起草を依賴して其儘出版しぬるものあり是れ讀者の倦厭を防かんか爲めかり(平假名を用ゆ)

一本書は一々石版摺の肖像を掲くる積りなりしが間々寫眞の寄送を承諾せられざる向あるを以て已むを得ず総て掲載せざることゝなしぬ是れ寫眞を惠まきたる別て態さ撮影送付せられたる諸君は叩謝する所かり

明治二十二年五月　　編者識

281.04 0 9512g

現今名家記者列傳上卷目錄

末廣重恭君……一
尾崎德太郎君……九
犬養毅君……一五
杉江輔人君……二三
高田早苗君……二七
山縣悌三郎君……三二
山田武太郎君……四〇
加藤政之助君……四八
三宅米吉君……五四
饗庭與三郎君……五八

国立国会図書館
29. 7. 22
337073

日下部三之介君……六四
吉田熹六君……六九
戸城傳七郎君……七七
瀧本誠一君……八一
伴直之助君……八七
青木匡君……九一
辰巳小次郎君……九六
關直彦君……一〇一
須藤光暉君……一〇七
（以上拾九名）

現今名家記者列傳

大屋專五郎編輯

○末廣重恭君

君幼名ヲ雄三郎ト稱シ鐵腸ト号ス嘉永二年二月豫州宇和島ニ生ル幼ニシテ父母ヲ失ヒ姉ノ鞠育スル所トナル十五歳ニシテ始メテ藩校ニ上リ切瑳螢雪鷄鳴尙ホ書冊ニ對ス十八歳八幡濱ニ遊ンデ儒者上甲禮三氏ノ門ニ入ル慶應二年藩校ノ舍長タリ陽明ノ傳習錄ヲ讀ミ良知說ヲ唱ヘテ敎官ノ說ニ違フ遂ニ一書ヲ著ハシテ之ヲ辨ズルニ至レリ一夜地震ヒ家屋搖動ス靜坐自カヲ心ノ動クヲ覺ユ是レヨリ愈ヨ陽明ノ說ヲ講習シ夜半愛宕山ニ攀ヂ古祠ニ入リ坐禪ヲ組ンデ心ヲ錬リシ

アリシト云フ明治二年藩學校敎授タリ藩政ノ改革ニ當リ選バレテ議

員トナル幾バクモナク最モ權力アル參政何某ヲ彈劾シテ之レヲ屏ゾ
ク一藩眸ヲ屬ス此年藩學ニ皇學者ヲ召聘セシガ君早速之ヲ見テ議論
合ハズ講堂ニ面折シテ再タビ藩學ニ出入スルヿ能ハザラシム翌年笈
ヲ負フテ始メテ東都ニ遊ブ當時戰爭ノ餘ヲ承ケ書生ノ風習放縱ニシ
テ眞成ニ學業ヲ勉强スルモノ稀シ君慨然トシテ曰ク東京ハ學問ヲ爲
スノ地ニアラズト八月ニ至リ去ツテ大坂ニ赴キ直チニ鄉里ニ歸ラン
トスルニ際シ京都ニ陽明學者春日潛庵氏アルヲ聞キ往イテ其門ヲ叩
キ得ル所多シ五年鄉里ニ歸リテ復タ敎授ニ從フ后チ出デヽ神山縣ノ
小吏タリ同縣廢セラルヽニ及ビ轉ジテ愛媛縣ニ出仕セシガ長官ト意
見ヲ同フセズ決然冠ヲ掛ケテ再ビ東京ニ來リ伯樂ノ一顧ニ逢ハズ己
ムヲ得ズシテ大藏省ノ屬吏ヲ拜命ス蓋シ其意ニ非ザルナリ往年茲ニ
三週歲八年漸クニシテ曙新聞社ニ入リ主筆トナル時ニ新聞紙條例及

ビ讒謗律新タニ出ヅ君憤慨自カラ禁ズル能ハズ遂ニ政府ハ嚴酷ニ
失セリト論斷セシカバ忽チ其筋ノ審問ヲ受ケテ禁獄三ケ月罰金參拾
圓ニ處セラル蓋シ新聞紙條例ニ抵觸スル者ノ率先ナリ是レヨリ君ノ
名聲漸ヤク著ハル滿期ニ及ビ曙新聞主義ヲ變ズルノ故ヲ以テ辭シテ
朝野新聞ニ入ル九年一月復タ官吏讒謗ノ廉ヲ以テ禁獄八ケ月罰金貳
百圓ノ言渡ヲ受ケ故柳北成島氏ト共ニ鍛冶橋內警視廳ノ獄ニ下ル然
レドモ此時ノ文章ハ實ニ成島氏一人ノ筆ニ成リシモノニシテ再三其
揭載ヲ見合センヿヲ勸メタリシカドモ用ヒラレズ遂ニ同ジク罪ヲ得
タルナリト云フ君ハ是レマデ英書ヲ繙キタルヿナカリシガ在獄中英
語獨案內ヲ手ニシテ獨修シ出獄ノ際ニ當ツテハ粗ボ英書ヲ解スルニ
至レリ十四年春肥塚大石ノ諸氏ト謀リ有志者ヲ上野ノ精養軒ニ會シ
テ大同團結ヲ爲サントス目的ヲ達セズ後チ自由黨ノ起ルニ會シ奮ッ

テ其組織ニ盡力シ常議員トナル總理板垣退助氏ガ洋行ヲ爲サントスルヤ議論合ハズ即チ同黨ヲ脫シ馬場、大石ノ二氏ト共ニ獨立黨トナリテ屢バ其主意ヲ演說シ自由改進兩黨派ノ軋轢ニ際シ小異ヲ捨テヽ大同ヲ取ルノ必要ナルヿヲ主張セリ爾來專パラ朝野新聞ニ從事シ鐵筆ヲ揮ッテ盛ンニ論述スル所アリ傍ラ餘暇ヲ以テ著書ヲ事トシ小說ノ仮面ヲ被ッテ頻リニ政事上ノ意見ヲ述ブ就中二十三年未來記ハ非常未曾有ノ聲價ヲ博シ忽チ之ヲ飜刻スルモノ二十余版ノ多キニ上リ賣高モ亦三十萬部ヲ超過シタリト云フ雪中梅ヤ花間鶯ヤ現今の政事社會ヤ一トシテ世人ノ賞讃ヲ受ケザルモノナシ二十年條約改正ノ中止ニヨリ人心ノ漸ヤク勃起スルニ當リ之レヲ機會トシテ熱心ニ自由黨改進黨ノ間ヲ奔走シテ再ビ協和ノ畫策ヲ施シタリ又成ラズ翌年春米國ニ向ッテ出發シ次デ歐洲ニ渡リ英米二國ヲ遍遊シテ仔細ニ視

察ヲ遂ゲ將サニ全歐ノ歷遊ヲ試ミントス然レヒ我邦今日ノ勢ハ君ヲシテ永ク三千里外ニ滯留セシムルヿヲ肯ンゼズ本年憲法發布ノ當日即チ二月十一日ヲ以テ歸朝シタリ故アリテ朝野新聞社ヲ退キ東京公論社ノ招聘ニ應ジテ之レガ主筆トナル間モナク新富座ノ大演說會ニ出席シ流々乎政事上ノ主義ヲ開陳シテ大同團結ノ大主意ニ贊成ヲ表シタリ引續ヒテ大同派ノ委員トナリ四國中國ヲ歷遊シ歸リ來ッテ大同團結ノ大會ニ臨ミ最モ周旋盡力シ又愛媛縣ノ委員トナリテ常議員ニ列セリ

前記ノ外尙ホ落葉のはき寄軋轢の原因雨前の櫻等ノ著アリ又洋行中起草セシ鴻雪錄ナル一書ヲ訂正シテ不日出版スルト云フ

居士之ヲ艸シ終ル友人友水子諾ッテ曰ク「詳細確實更ニ遺憾トスル所ナシト雖ヒ如何ナレバ末廣氏ニ限リ例ノ喋々ヲ加ヘザル」對ヘテ曰ク

「鐵腸氏ノ掛直ナキ飾リナキ經歷實ニ此ノ如シ若シ一々上下褒貶ヲ狹マバ洛陽ノ紙價爲メニ幾分ノ影響ヲ受ケン居士ノ遠慮スル所全ク茲ニ在ルナリ且ツ夫レ鐵腸氏ハ普チク人ノ知ル所敢テ居士ノ禿筆ヲ要セズ茲ニ詳細ナル實傳ヲ掲ゲテ以テ世上ノ君子ニ分タントスルノミ」

刀根川舟中　　鐵腸居士

江流依舊自榮回。一世雄圖付刼灰。崖樹森々人不見。冷風寒月過鴻臺。

書友人文稿後

同窓舊友散如雲。杯酒何時再會君。半夜小樓風雨暗。剪燈獨讀故人文。

對雪有感

京城一夜寒凛烈。北風吹送滿天雪。門外人絶無履聲。老松枝垂修竹折。掲起小簾擁火爐。飛絮點衣風裂扇。呼酒獨吟多感慨。十年往事夢模糊。憶起西都待師席。靜坐只見紙窓白。滿堂穆々春風温。出門積雲深三尺。又憶凍風壓弧逢。絃歌載酒柳橋東。醉眼迷離水中墜。美人援起顏潮紅。又憶囚衣無簑笠。獄吏鞭撻何太急。一片精誠感鬼神。滿城風雪天亦泣。半生得失付雲煙。悲懷都消一樽前。詩成硯水半氷結。簷端墜雪響鏗然。

鎌倉懷古

憑吊如今感豈窮。當年誤策大頭公。逮華摘盡友情絶。抔土未乾鴻業空。瑞鹿山深雲埋樹。白幡祠古鳥哀風。朱門甲第無蹤迹。一望荒田長乱蓬。

英國帝夢洲河舟中作

綺窓粉壁幾多樓。光彩射波金碧流。二八少女能慣水。玉如纖手盪蘭舟。

（居士此稿ヲ脫シ日ヲ隔テヽ君ガ公論社ヲ辭シタルヲ聞ク然レトモ折角承諾ヲ得タルモノナレバ最初ニ掲載スルヿト爲シタリ又君ガ退社ノ因緣ハ公論社ハ中立主義ヲ取リテ政黨外ニ立タントシ

君ハ純然タル大同團結ノ謀士タルヲ以テ意見合ハズ協議ノ上遂ニ其ノ主筆ヲ辭シタルナリト）

○尾崎德太郎君

文庫（硯友社）

（大屋居士本書ノ編纂ヲ思ヒ立チシ當時ハ非常ニ取込ノ用事アリシヲ以テ紅葉山人尾崎君ヘ宛テ詳細ナル經歷事實書並寫眞ヲ贈與セラレ度旨ノ書柬ヲ出セシニ數日ヲ經テ傳記入ノ面白キ回答ヲ得タリ依テ茲ニ其全文ヲ掲載スルヿトナシヌ）

此度（新聞雜誌記者列傳）御編纂のよしにて。私如きをも諸名家の一列に加へさせられんとの事。冥加のほど恐ろしく候。幼少よりの傳記を詳細にとの御言葉には候へども。私如き若輩づれの生立に。何の記すべきほどの事可有之や。大石良雄、宮本武藏の實傳一代記あるべ。はとれあり候へども。下部可内家主佐次兵衛の履歷をかいたものいまだ見當り不申候。これとてもかいてかけぬ事はあるまじう候らへど。かくべき價直な

ければころに御座候。私可内はぞも人の用にたちしこと無之。まして佐次兵衛が人の世話及びもなき事に候。是ばかりは堅く御斷申上候。もつとも母の胎内を出で候ひしより二十余歳の今日まで。虫氣もなくすこやかに成人致し候へ。大分の年月かゝり居申候へば。其間に何事のなきには候はず。書立申候處がまことにつまらないのみに御座候。うれにても苦しからずと仰せられ候はゞまづかやうなものに御座候。但し手前味噌少々加味仕候ろの段は御承知被下度候。　私芝の出生に御座候。此土地は魚賣の本場に有之候へば。自然人氣荒く候へども。私は滿容柳質ずんと華奢なうまれと。近所のもの至極譽め申候よし。親どもの物語にて聞及び候。しかしこれは廿酒進上の頃の事なれば。自分今に毛頭覺へ無之候。　七歳の秋寺兒屋入りを致候。此頃より追々芝ッ子氣象あらはれ。喧嘩口論好に相成。いまなほ眉間に殘る切疵は。此折り石を投げ

られしものに御座候。五六歳の頃より玩具、繪本、繪草紙を殊の外好み申候。自讀で申せば蛇は一寸にして其氣を顯はすといふ處にや覺束なく候。　右寺兒屋明治六年頃私立高等小學校に相成。こゝに十五歳まで罷在り專ら漢籍を稽古いたし候。此年の秋始めて英學を志ざし……　是も自分量見にて修業いたさうなどゝ。左樣な高慢ちやくれたる考はすこしも無之。親がしきりにやれ〳〵と申候ゆゑ。無據處ウェブスターの綴字編をさる官員の私宅にて敎へ貰ひ候。私性來豆腐と數字大嫌ひにて開平開立を稽古いたし居候頃。四則雜題も覺束なく數學にかけては朋輩に頭が上らず。隣家の漢方醫の書生にて心安きものは。私を解毒劑と諢名いたしゐ。これは山歸來ー算嫌ひーといふ洒落のよしに御座候。十五歳より英學塾、漢學塾、官立學校。合せて六七度も學校を替へ申候へども學問は思ふ半分も上達致さず。其内にふと爲永の人情本に迷ひ。世の

中にこんあおもしろいものはあるやうに覺へ。ケの味片時も忘れ難く毎夕散歩と見せかけ。隣町の貸本屋へ通ひ一部五六冊を内懷へ押込み二階(これが書齋あるりし)へ持歸り晝は史記としるせる本箱の奥に忍ばせ。夜は十時まで課業の書籍をいや〳〵あがら閲讀しろれより寐床へもぐり例の陰し妻をとり出だして二時位まで人知れず樂み申候かゝる小説は娼婦治郎の見るものとして。親どもの嚴禁にいへば。隨分これには苦勞をいたしい。久しからずしてこれも見倦き。三馬の滑稽物に氣を移し諸事本丁庵の事だらうあざゝ。此人を伯父さんのやうに吹聽し。かたはら京傳の洒落本に魂を打込み西洋小説を字書の後見つきで。一時間に六七行を油汗よじりに讀ずとも。わが日の本にこんあ物が〳〵と斜めあらず執心致しい。しかし馬琴、種彦はあまり好まぬ方にて。八犬傳はとび讀。田舍源氏は繪解にて滿足致し何か外に珍本はと求いひし

がうの頃は當時はゞ小説流行致し候はねば。斯道の好者にあふ事あくたゞ貸本屋での珍らしい本を相手にいたし。ひとり「をつ〳〵」とよがり候のみ。明治十七年の夏。朋輩兩名と我樂多文庫をはじめ陳渉の席旗これと。大分夢中に相成。此頃から全く小説にとりつかれ。ゆく〳〵はとの道にて第一流の名家たらんとげしからぬ大望をさしはさみ候ひしに。惜ひかな皇天此英才子を妬み。十八年の十月花の盛りの十九歳を一期として。眠れるごとく往生を遂げかねまじき腦病にかゝり。醫藥其力あきばかりあれは。自分もこれまでと思ひ人知れず辭世の狂歌を鼻紙にしるして蒲團の下へ藏し置きたる手際などは。まことに凡夫の及ばざる處と衆みあ感ぜずといへども。自分常に心服いたし居候。此年十二月半に至り全癒いたし候へども。其後は腦力以ての外薄らぎ氣根つゞかざれば名案名文も無之。實に二十世紀の大家を一人見殺しにせしや

うなものと。いつも思ひ出し候ては兩袖をひたし申候

前記の通り幼少の折は。一方あらぬあばれものにて候ひしが。此頃いわるく老成に相成。常に書齋に垂籠て。俗物のいはゆる物見遊山を好まず性偏にして曠かましき席。または知らぬ人多き處へまかり出ることを喜ばず。寐轉んで煙草をふかしながら。小說を見ると駄洒落をいふ事第一の好物に御座候。扨又寫眞御所望よは候へども生憎手元に一枚も無之。これから寫すと申しても日數かゝり候へば。友人松岡綠芽君に依賴いたし御覽の通りに寫して貰ひ候。男を損ぜぬやう彫刻最も念入に願上候以上

五月節句　　尾崎德太郎

大屋專五郎樣

○犬養毅君

朝野新聞

君木堂居士ト号ス備中國庭瀨ノ人ナリ父水莊板倉氏ニ仕ヘ最モ親信セラル後チ所思アリ冠ヲ掛ケ退ヒテ鄉士トナル素トヨリ典籍ニ長ズルヲ以テ旁ハラ近鄉ノ子弟ヲ集メ熱心銳意忠ヲ講ジ孝ヲ義ス君ハ幼ニシテ重モニ家學ヲ爲シ又森田月瀨(節齋ノ弟星巖ノ門人)ニ隨ガヒ后チ同姓犬養松窓翁ノ塾ニ入リテ漢籍ヲ修ム黽勉度ナク而シテ才益々限リナシ翁常ニ君ノ頭ヲ撫デヽ曰ク汝ノ學ヲ好ム予ニ超ヘタリ剛毅ノ性ヲ以テ夫レ此ノ如シ汝ノ成必ラズ小ナラズ毅也々々嗚呼可憐兒也矣哉

明治七年君飄乎トシテ東京ニ來リ先ヅ共慣義塾ニ入ル未ダ半歲ナラズシテ學資ノ供給ヲ失ヒ怏々トシテ歸國ノ途ニ上リ偶マ知人某ニ逢

ヒ語ルニ狀ヲ以テス某慰藉シテ曰ク資金ノ故ヲ以テ歸ル誠トニ不可ナリ大功ハ必ラズ苦學ニ成リ艱楚ハ必ラズ奮勵ヲ發ス東都ニ余ノ姻戚藤田茂吉ナル者アリ性義俠喜ビ迎ヘテ子ヲ寓スベシ請フ子ガ爲メニ紹介ノ勞ヲ取ラント即座ニ一枝ヲ染メテ之ヲ與フ君乃ハチ一通ヲ懷ロニシ直チニ踵ヲ回ヘシテ再タビ東京ニ來リ鳴鶴藤田氏ヲ濱町ノ宅ニ訪フ果シテ某ノ言ノ如シ氏立ドコロニ甘諾シテ寄食セシム君是ニ於テ玄關程遠カラザル所ニ居室ヲ占メ取次掃除食客タルコト年余君固ト文ヲ善クシ論ヲ好ム藤田氏未タ之ヲ知ラズ一日君ニ托スルニ文筆ノ事ヲ以テス時ヲ出デズシテ稿ナリ之ヲ閲ミスルニ一點ノ汚スベキナシ氏此ニ於テ始メテ君ガ有爲ノ才アルヲ知リ是ヨリ君ヲ待スルコト甚ダ重キヲ致シタリト云フ君同氏ノ周旋ニヨリ一行ニ付キ幾何ノ報酬ヲ送ル可シトノ約束ニテ郵便報知新聞ヘ論説ノ投書ヲ爲ス

コトニ定メ之レヲ以テ漸ヤク慶應義塾ニ入學スルコトヲ得タリ然レドモ課業多クシテ投書ヲ艸スルノ暇ナカリシカバ夜就眠ノ時間ヲ偷ンデ之レニ從ガウ遇マ塾監ノ巡視スルニ當レバ燈ヲ案下ニ排シ毛布ヲ以テ案ノ三面ヲ蔽ヒ而シテ闌夜案下ニ之レガ起艸ヲ爲シタリト云フ其艱苦ヲ嘗メ學業ニ從事スルコト大畧此ノ如シ鐵腸石心剛毅ノ氣象ニ富ムニアラズシテ寧ンゾ克ク此苦楚ト戰フ、コトヲ得ン……嗚呼高帽ヲ戴キ絹布ヲ纏ヒ人車ヲ馳セテ揚然タル書生諸君ヨ一度ビ木堂居士犬養毅君ノ門戸ヲ敲ケ……而ルニ君ノ投書コハ常ニ杉山毅ノ僞名ヲ用ヒタリ而シテ當時未ダ杉山ノ名聲少シモ顯著ナルニ至ラズ幾干クモナクシテ明治十年ノ星霜ヲ迎ヘヌ偶マ西南ノ役起リ朝野囂然唯首ヲ延ベテ捷報ニ接センコトヲ希フ諸新聞社ニ於テモ特ニ社員ヲ派シテ其戰況ヲ探レリ君是ニ於テ報知社ヨリ選擇セラレ同社員ノ名義ヲ

以テ通信員トシテ戰地ニ向ヒ出立シタリ而シテ他二三新聞社ノ通信員ハ皆多少交際場裏ノ仲間入リヲ爲シタル者ナリケレバ實況ノ報道ナリト稱スレドモ自ヅカラ記事ニ遠慮ヲ配劑シテ頗ル識者ノ非難ヲ受ケタリ獨リ君ハ身未ダ一寒書生タルヲ免ガレズ從ツテ交際ナク又知人ナク毫モ筆端ノ緊束ヲ覺ヘズシテ記事詳細確實ナリケレバ大ニ世人ノ注目スル所トナリ是レヨリ犬養毅ノ名漸ク顯ハレ報知新聞ノ聲價モ亦爲メニ一倍ヲ加ヘタリ初メ君ノ發途セントスルニ當リ戰場ニテハ紛問甚ハダ嚴密ニシテ若シ僞名等ノ露見スルニ於テハ忽チ秋水ニ死セントノコヲ聞キタリシカバ發足ノ當日ヨリ俄カニ本性犬養ヲ名乘リタリ而シテ君ハ戰況ヲ目擊シテヨリ肥馬ニ跨ガリ長刀ヲ横タヘ勇氣勃如タル軍人タラント欲シ隈山谷將軍ニ謁シテ此旨ヲ致ス將軍微笑シテ遂ニ之ヲ許サヾリシト君又戰地ニ於テ一枚ノ藁蓐ニ臥

シタルガ爲メ劇シキ下痢病ヲ發シタレバ洋服ノ臀部ニ大孔ヲ穿チ置キ砲聲ニ應ジテ樹陰荊棘ノ間ニビチ〳〵ノ音ヲナシナガラ實況ヲ目擊シタリト云フ此時漸ク二十二歲ナリ

十三年君大ニ感奮スル所アリ菅了法氏等ト計リ東海經濟新報ナルモノヲ發行シテ頻リニ保護經濟主義ヲ唱フ此時ニ當ツテヤ在朝在野ノ學者論客ト稱スルモノ盡ク自由經濟主義ニ心醉シテ曾テ保護ノ二字ヲ口ニスル者ナシ君大聲疾呼此ノ四面反對說ノ中ニ立チ乾然トシテ保護主義ノ雜誌ヲ發行シ以テ世人ヲシテ其主義ノ如何ヲ了知セシメタリ豈快ナラズヤ我邦新聞雜誌ノ保護主義ヲ以テ起ルモノハ勿論此主義ヲ世ニ明ニシタル者ハ蓋シ君ヲ以テ嚆矢トス實ニ我邦經濟社會ノ曉鐘ナリト云フモ敢テ過當ニアラザルナリ越ヘテ十四年統計院ノ權少書記官トナル暫ラクシテ內閣ノ變更ニ逢ヒ伯爵大隈重信君ト共

ニ辭表ヲ捧ゲ爾後再タ官ヲ欲セズ翌年報知社ニ入リ初メテ新聞記者ノ員ニ列ス若干タモナク改進黨ノ創立ニ際シ率先シテ同黨員トナリ櫛風沐雨最モ力ヲ盡シテ奔走セリ此年撰ハレテ東京府會議員トナリ習年常置委員ニ推薦セラレ以テ今日ニ至ルマデ汲々乎府民ノ利益ヲ計ル十七年ノ始メ秋田及東北地方ニ遊ビ財産ナク學識ナク敝袍ヲ穿チ鐵鞭ヲ揮ヒ自カラ志士ト稱セル黄口ノ青年輩ガ別段時勢ノ必要モナキニ氾リニ演説會ヲ開キ人衆ヲ集メテ以テ已レガ辨舌ヲ試ムルノ弊害ヲ悟リ歸京以後本年四月ニ至ルマデハ席上演説ヲモ爲シタルコトナシト云フ翌年末廣重恭氏等ノ招聘ニ應ジ轉ジテ朝野新聞社ニ入リ爾來大ニ社務ノ改良ヲ計レリ其間日本經濟會ノ設立又ハ決鬪ヲ申込マレタルコ等ノ事實アレドモ世人ノ記憶ニ存スルモノナルベケレバ茲ニ贅セズ

君ノ著譯書ハ圭氏經濟學、議事典型、政海之燈台等ニシテ皆好評ヲ得タリ

頃日君ハ大同團結ヲ贊成シ大同團結ノ爲メニ奔走盡力スルヲ以テ「改進黨ノ裏切ヲ爲シタリ」トノ評判アリ然レドモ編者大屋居士ハ自カラ信ズ政事家ノ變説ハ必ラズシモ不德義ト云フ可カラザルナリト奈何トナレバ曩キニ改進黨創立以來同黨員トナリテ鋭意計畫スル所アリタリト雖ドモ何分ニモ同黨ノ運動甚ハダ不活潑ニシテ其方法手段ハ到底吾ニ滿足ヲ與フルヲ期スベカラズ而シテ大同團結ナルモノ新タニ出ヅ稍ヤ吾主義トスル所ニ合フ以テ一臂ヲ揮フニ足ル終ニ轉ジテ大同團結ニ入ルト嗚呼何ノ不可ナルコカ之レアラン茲ニ改進黨員ニシテ同黨ノ運動政畧ニ付キ不滿ヲ抱ク者アリ而シテ批評ヲ恐レ枉ゲテ之レニ從フ其優劣凡ソ如何ヲヤ居士ハ寧ロ君ノ活潑ナル所爲ヲ欣

慕スル者ナリ賞揚スル者ナリ然レドモ本堂居士ヨ君ハ己ニ改進黨ノ名簿ヲ脫シタリヤ否ヤ若シ未ダシトセンカ吾人ハ「裏切」ヲ呼ブニ躊躇スルヿ能ハザルナリ

○杉江輔人君

日本人（政敎社）
筆之刀

君ハ舊廣島藩士杉江千習氏ノ末子ニシテ文久二年二月十六日備後國三原ニ生ル資性鋭敏幼ヨリ大志アリ五歲ノ時已ニ能クいろはヲ書シ童子敎ヲ讀ム一日阿父ノ膝下ニ在リ阿父君ニ問フテ曰ク「汝後來如何ナルヿヲ希望スルヤ」答ヘテ曰ク「江戸ニ留學シテ名聲ヲ揚ゲン」ト聞ク者歎賞セザルナシ然レドモ君又非常ニ遊戲ヲ好ミ其群兒ト伍スルヤ已レ常ニ之レガ巨魁トナリ鼠煙火ヲ以テ大砲ニ擬シ竹馬ヲ以テ劍銃ニ代ヘ猛進勇鬪傷痍ヲ示シテ已レガ戰功ヲ誇ル是ニ依テ「乱暴者」ハ君ガ代名詞タリ爲メニ長老ノ擯斥スル所トナル年十二大ニ悔悟ズル所アリ斷然劍戟ヲ捨テヽ復タ戰鬪ヲ演ゼズ藩儒某ニ就キテ一意漢籍ヲ修メ敢テ或ハ怠ルヿナシ明治七年廣島英語學校創設セラルヽニ及ビ

率先シテ同校ニ上リ謹慎勉學マタ往日ノ如クナラズ頗ル內外ノ賞賛ヲ受ケタリ就中同校々長吉村寅太郎氏(現在第二高等中學校々長)ノ如キハ最モ君ヲ愛シテ提携怠ラズ十年英語學校ノ廢止ニ際シ君尙ホ年少羸弱ナルヲ以テ父母之ヲ遠地ニ手離スヿヲ躊躇シタレドモ吉村氏ノ懇篤ナル盡力ニヨリテ竟ニ上京スルヿトナリ一君大ニ喜ビ笈ヲ負フテ始メテ東京ニ來リ直ニ東京大學豫備門ニ入ル十二年九月東京大學本科ニ移リ政治學理財學ヲ修ム終ニ十七年七月ヲ以テ首尾能ク全科ヲ卒業シ文學士ノ稱号ヲ得タリ君ノ同校ニ在ルヤ常ニ謂ヘラク學問畢竟該博ヲ要ス學校日課ノ如キハ强ガチ必要ノモノニアラズト連日圖書館ニ赴キ諸科ノ書籍ヲ渉獵シテ余リ日課ヲ勉メザリシト卒業ノ間モナクシテ會計檢査院御用掛ヲ拜命シタリシガ同院ノ如キハ當時職權甚ダ狹隘ニシテ事業亦頗ル不活潑ナリシカバ居常悒々トシテ

樂マズ十九年四月ニ至リ同院官制改正ノ際決然辭表ヲ呈シ久シカヲズシテ宮城縣師範學校ノ召聘ニ應ジ赴任シテ一等教諭トナル是ヨリ先キ君ハ或ル事業ニ着手シテ大ナル失敗ヲ來タシタルガ爲メ多少ノ負債ヲ生ジタルニヨリ已ムヲ得ズ財政整理ノ目的ニテ一時地方ヘ出掛ケタルモノニシテ此行ハ固トヨリ君ガ素志ニアラザルナリ越ヘテ二十年五月宮城縣師範學校ヲ辭シ東京ニ歸ル爾來友人ノ府下ニ學舍ヲ開設シ居ル者多キヲ以テ其教授ヲ担當シ子弟ヲ薫陶スルヿ多キニ居ル翌年四月大ニ時事ニ感スル所アリ十數名ノ學士ト協同シテ政教社ナルモノヲ設立シ雜誌「日本人」ヲ發行シ國粹主義ヲ唱導シテ大ニ世人ノ注意ヲ惹起シ爲メニ歐洲主義沁醉……ノ徒ヲシテ大ニ其聲氣ヲ屏息セシメタリ嗚呼盛ナル哉君又政教社ニ盡力スルノ傍ハラ本所江東義塾學會ヨリ發行セシ「學」ノ主筆タリシガ偶マ筆鋒ヲ誤ツテ內務省

ノ指令取消ヲ蒙ムリタレバ更ニ振文社ヨリ發兌スル「筆之力」ノ主筆トナリ今ヨリソノ後チ盛ンニ文壇ニ馳聘セントス其他諸雜誌ノ特別寄書家トナリテ熱心銳意鉛塹ニ從事セリ

讀者君ヲ評セント欲セバ先ヅ左ニ掲ゲタル君ガ述懷ヲ味フ可シ

述懷

かくすれば身の爲めあしと知りながら
いわでやむべき胸のまどゝろ

○高田早苗君

讀賣新聞（日就社）
憲法雜誌

曾テ演劇改良ノ事ニ關シ井生村樓（今鴎遊館ト云フ）ニ大演說ヲ爲シテ頗ブル世人ノ喝采ヲ博シタル文學士高田早苗君ハ万延元年三月江戸深川ニ生ル七歳ノ時ヨリ濡者某ニ從ッテ專パラ漢籍ヲ修ム明治六年英書ヲ學バント欲シテ共立學校ニ入リ翌年外國語學校ニ移ル切瑳琢雪重モニ夜ニ於テシ時辰器十一時ヲ報ズルニアラザレバ決シテ寢床ニ入ラズ之ニ依テ學業著ルシク進歩シタリ八年冬又タ轉ジテ東京英語學校ニ入リ年ヲ越ヘテ開城學校（後チ東京大學ト改稱セリ）傳科ニ入學ス此時春秋十七ナリ十一年東京大學本科ニ進ミ政治學、經濟學ヲ修ム十五年遂ニ東京大學ヲ卒業シテ文學士ノ學位ヲ受ク此時ニ當リ君ヲ官途ニ勸ムルモノアリ君斷然之レヲ退ケテ曰ク「今ノ官ニ仕フル者

概チ學位ヲ餌トシテ虚榮ヲ貪ル入レバ即チ諂諛ヲ賣リ出ヅレバ即チ御機嫌ヲ買フ而シテ敢テ我專門ニ學得シタル智識ヲ應用スルコトヲ計ラズ只地震是レ恐ル我寧ノ此輩ト伍スルヲ屑シトセンヤ嗚呼官途……今日ノ官途何ヲカ爲サン」此年十月牛込早稻田ニ東京專門學校ノ創設アリ大隈伯ノ資金ヲ投シテ創設セラレタルモノニ係ル君遂ニ同伯ノ囑托ニ應ジテ專門學校ノ講師トナリ爾來今日ニ至ルマデ奮ッテ教授ヲ担任シ且ツ其校務ニ與カリ大ニ計畫スル所アリ居士ハ之ヲシテ今日ノ隆盛ニ達セシメタルハ偏ヘニ君ノ經營盡力ニヨルト云フモ決シテ過當ニアラザルヲ信ズ二十年君日就社ノ囑托ニ應ジ入社シテ讀賣新聞ノ主筆トナル校務ノ余暇ヲ以テ筆ヲ執ルモノニ過ギズト雖モ爾后同新紙ノ聲價非常ニ倍加シタルヲ以テ其一班ヲ推知スルニ足ルナリ又本年ニ於テハ講壇改進憲法雜誌ナルモノヲ發行シテ其主

筆ヲ兼ヌ君ノ憲法學ニ精シキハ一度ビ同誌若クハ君ガ著通俗憲法註釋ヲ繙ク者ノ了知スル所ナリ蓋シ同誌ノ目的トスル所ハ此憲法自治制發布ノ時ニ當リ腦髓開拓ヲ以テ最モ急務トシ此雜誌ニヨッテ眞正ナル學理思想ヲ普及セントスルニアルガ如シ又講壇改進ナル語ハ君及ビ同志者ノ懷抱スル主義ヲ表明スルモノニメ講壇ノ上ヨリ眞正ノ學理ヲ普及セシメ社會ノ改進ヲ計ルト云フノ意ニ外ナラザル可シ君又曩ニ中央學術雜誌ノ主筆タリシガ日就社ニ入ルニ際シテ之ヲ廢刊セリ曾テ同紙上ニ於テ春の屋主人著書生氣質ノ細評ヲ爲シテ大ニ世人ヲ動カシタルヿアリキ此時迄ハ吾人ニ忠義ヲ盡サンガ爲メノ新聞社ニ於テスラ書物ヲ能クモ繙カズ暗雲ニ賞揚スルヿヲ勤メ茫乎タル「感々服々」ナル同一樣ノ畧評ノミ行ハレテ丁寧ニ信切ニ細評ヲ與ヘタルモノナシ始メテ細評ヲ公ニシタル者ハ蓋シ君ヲ以テ嚆矢トス夫レ

ヨリ書籍ノ批評盛ニ流行シ次デ出版月評ノ發行アルニ至レリ批評ハ猶ホ彈正臺ノ如シ嗚呼批評ノ功……君ノ功モ亦大ナル哉其他東京ニ地方ニ學術演説講習會ニ臨席シテ學校外ノ教育ニ盡力スルヿ少ナカラズ又君ハ政事上ニ於テ改進黨ノ主義ヲ賛成スルモノヽ如クナレドモ學校ノ講師タルヲ以テ未ダ黨員ノ名簿ニ加入シタルヿナシ昨年明治倶樂部ノ東京ニ起ルニ當リテ幹事トナリ本年モ亦當選セリ

著譯ハ貨幣新論、租税論、外交政畧史、國會法、通俗憲法註釋、英國政典等ニシテ何レモ好評ヲ得タリ

君ノ經歴概子此ノ如シ經營奔走少ナシト云フニアラズト雖ヒ亦多シト云フ可ラズ學校ヤ雜誌ヤ未ダ君ヲ評シ去ルヿ能ハザルナリ何トナレバ君ガ全力ヲ擧ゲテ從事シタル仕事ニアラザル可ケレバナリ然則如何ナル文字ヲ羅フテ之ヲ結バンカ居士ハ今茲ニ喋々スルヿヲ止メテ君ガ滿腔ノ熱血ヲ灑イデ奔馳スルノ日ヲ待タント欲スルナリ君ヲ信ズルノ深キナリ

○山縣悌三郎君　少年園

君安政五年十二月ヲ以テ近江國水口藩ニ生ル兄某人ト爲リ嚴格勤王家ヲ以テ自カラ任ス漢學家中村粟園屢々之レト語リ歎賞措カズ遂ニ養ッテ子ト爲ス頗ブル興望アリ不幸ニシテ早逝ス君ハ其嚴正ナル薫陶ヲ受ケ大ニ剛毅ノ氣象ヲ養成シタリ幼ニシテ身体尪弱殆ント鬼籍ニ登ラシトスルモノ數次六歳ニシテ甫メテ藩校翼輪堂ニ入リ最モ才名アリ然レドモ抛石擬戰ノ戯ヲ能クセズ好ンデ柔和ナル遊ビヲ爲セシカバ常ニ朋輩ノ擯斥スル所タリシト云フ十歳ノ時選ハレテ藩公ノ世子某君ノ侍讀ヲ命ゼラレ一藩擧ッテ俊才ヲ賞シ益々望ミヲ屬ス三度ヒ春秋ヲ經テ單身東都ニ抵リ江馬氏ニ從ッテ漢籍ヲ修ム十五歳ノ春大ニ悟ル所アリ斷然志ヲ決シテ東都ニ遊バント請フ然レドモ元來

充分ノ資産ナク加之君ノ体力勁健ナラザルヲ以テ許サス强請再三未タ乃父ノ允許ヲ得ス一日阿母君ニ言ッテ曰ク汝詎ンゾ嚴父ノ意ニ逆フテ東遊ヲ欲スルカ答ヘテ曰ク學ヲ修メ才ヲ研キ進ンデ青雲ニ達セント欲スルノミ言訖リテ潸然復タ一言ヲ發セズ阿母到底其論スベカラザルヲ知リ私カニ金參圓ヲ與ヘ且ツ言ッテ曰ク學若シ成ラズンバ死ストモ歸ル勿レ君大ニ喜ヒ即夜行季ヲ調ヘ脫走ノ姿ニテ飄然鄕關ヲ出デタリ行旅ノ艱難知ル可キノミ已ニシテ漸ク着京シ先ヅ三番中學校ニ入ル干時ニ明治五年第三月ナリ遇マ病魔ノ來襲ニ逢遭スルコトアレバ即ハチ益々奮ッテ曰ク「彈丸雨飛ノ死地ニ臨ンデ而カモ愈ヨ鬪戰スルハ是レ武ノ本意ニアラズヤ然ラバ則チ諸子百家ノ學海ニ棹スノ學者ト雖ドモ亦艱而後已矣ノ覺悟ナカルベカラズ」毫モ阻喪ノ色ナシ講師「らいへー」之ヲ壯トシ君ヲ愛スル甚ハダ切ナリ書籍紙筆等

ノ費用ハ大抵同師ノ支出スル所ナリシト云フ三歳ヲ閲ミシ轉シテ外國語學校ニ入リ英學ヲ修ム然レドモ優遊自適又タ往日ノ如クナラズ但シ此時ニ至ッテハ猥ヤツ學資ノ欠乏ヲ告ゲ心ニ平ナラザルモノアリシニ由ルナリ荏苒茲ニ二周歳曾マ高等師範學校ニ於テ中學科生徒ヲ募ル君早速第ニ應シテ入校セシガ爾後專パラ力ヲ理科ニ致シテ敢テ他ノ科目ヲ修メズ連日好ンデ圖書館ニ赴ムキ有ラユル理科ニ干スル書籍ノ渉獵ヲ事トス而シテ校堂ニ在リテ理科ハ勿論他ノ科目ト雖ドモ又決シテ尋常學生ニ後レズ遂ニ明治十二年春期ヲ以テ首尾能ク卒業シタリ幾干クモナクシテ埼玉縣ニ次デ宮城縣ニ中學師範學校教諭兼幹事ニ任ゼラル折柄學校ノ改革論大ニ行ハレ論議百出甚ハダシキニ至ッテハ援助ヲ腕力ニ求ムルモノナドアリテ喧擾一方ナラズ君亦此風潮ニ乘ジ無經驗ナル無頓着ナル改革ヲ實行シタリシカバ衆生

徒ノ怒リヲ惹起シテ或ハ飛石ニ駭ロキ或ハ鉄拳ヲ辱フシ失敗還タ回ス可カラズ悄然辭表ヲ留メテ京ニ歸ル此時ニ當リ文部省大ニ小學校教科書ヲ蒐ム君乃ハチ托ヲ受ケテ拮据編輯ニ從事シ奏功多キニ居ル後チ又愛媛縣師範學校ノ教師ニ任ゼラレ一歳ニ滿タズシテ校長ニ進ム十五年更ニ文部省御用掛ヲ拜シ尋デ學習院教授ヲ兼ヌ十九年冬君慨然歎シテ曰ク「吾ハ教育ノ社會ニ一身を投ズル者ナリ固トヨリ教育ノ普及ヲ以テ自カラ任ゼザルベカラズ而シテ今ヤ實ニ文部省ニ學習院ニ孜々トシテ營ヲ碎クモ章程定メアリ時間限リアリ五尺ノ軀寸志ト違フ吾豈此ニ止マルベケンヤ」直チニ解職ヲ乞フ蓋シ昨冬ニ至リテ少年園ナル東洋ノ「はるとまん」「かんぺい」ノ出生シタルハ此伏線ヨリ來リタルモノニアラザルナキヲ得ンヤ彼ノ世人ノ愛讀シテ惜カラザル理科仙鄉ナル譯書第一卷ハ實ニ此辭表ト同日ニ發行シタルモノナリ

君ノ此書ニ從事スルヤ朋友ニ告ゲズ太陽ニ知ラセズ突然辭表ヲ差出シタル當日ニ發シ數旬ヲ出デズシテ又二卷ヲ發行セシカバ其孤鼠々々然タル手際ニ感服セザルモノナカリキ是レヨリ山縣悌三郎ノ名漸ヤク高ク同書ノ發賣高モ亦二万八千部ノ多キニ達シタリト云フ又君ハ世人ガ理科ヲ目シテ解シ難ク學ヒ易カラザルモノトナシ却ッテ眼前咫尺ノ事物ニ就テ研究スルコトヲ爲サス夫ノ六花ヤ石炭ヤ珊瑚ヤ如何ナル事物ヨリ變化シ來リタルヤヲモ知ランコトヲ欲セス以テ奇妙不可思議ナルモノト見做シ冷然淡焉敬シテ遠ザクルガ如キノ有樣ナルヲ憂ヒ理科ノ普及即チ理科ノ中ニ神仙ナル者アリテ山河大地万般ノ事物ニ而白キ幻術ヲ施シッヽアルナリトノコヲ普チク世人ニ會得セシムルヲ以テ目的ノ一部ト爲シタルガ如シ居士ハ理科仙鄉ヲ繙ヒテ其必ラズ然ルヲ知ルナリ是レヨリ誰レ言フトナク人皆君ヲ呼ン

テ仙鄉學人ト綽号セリ君之ヲ聞テ曰ク善哉々々吾ニ名ヅクル誠トニ當レリ採テ以テ号トナス之レヨリ先キ君文部省ニ於テ通信教授ノ議ヲ起シ米國通信大學校ヨリ參考書類ヲ取寄セ詳細ナル調査ヲ遂ゲテ終ニ此四時ヲ見出シタリ當今諸學校ニ於テ此方法ヲ用ヰ僻陬ニ在ッテ坐ナガラ修學スルヿヲ得ルニ至リタルハ洵トニ善矣然ラバ則ハチ此通信教授ナル文字ノ仙鄉學人山縣君ノ腦裡ヨリ出デタルコトヲ忘ルベカラズ十九年以降ニ於テハ進化要論、理科通志、教育哲學史、教授之得失等ノ著譯ヲ公ケニシ傍ハラ學海之指針テウ學術雜誌ヲ發行セリ今ニ於テ信用ノ價値アル好雜誌ナリトハ公平適切ナル評語ナルベシ又諸教育會ノ名譽會員若クハ特別會員ニ推薦セラレ或ハ時々「にゆしいんぐらんど」教育雜誌ヘ我國教育ノ現象ヲ報導セリ君ノ教育社會ニ盡スコト概ムヲ斯ノ如シ豈偉且ツ大ナリト言ハザルベケンヤ此多端

繁雑ナル中ニ在リテ夙トニ少年教育ニ適當セル雑誌ナキヲ憾ミ高橋七郎、中川重麗ノ二氏ト計リ遂ニ昨廿一年十一月三日即チ長久万々歳ナル天長節ヲ以テ少年園第一号ヲ發行シタリ居士ハ少シク高尚ニ失セザルヤ(居士ノ如キ腦隋ノ者ニハ)ノ心配ヲ爲ス者ナレドモ体裁ハ中ニ及バズ記事ト云ヒ寄書ト云ヒ遒ガ大家ノ仕事ナレバ完全無欠復タ比類ナキ好雑誌ト云フ可シ而メ其第五號ニ於テ少年園ノ先途ト題シ雑誌以外ニ有スル所ノ希望ヲ述タリ曰ク「少年書類出版ノ「曰ク少年圖書館開設ノ「曰ク學資補助ノ「曰ク寄宿舍建築ノ「曰ク私立學校創設ノ「……嗚呼又居士何ヲカ言ハン今ヤ我國ニ於テ稗史政事等ニ關スル書類ノ上梓ハ實ニ著ルシク増加シタリ然リト雖モ將來二十世紀ニ向ッテ雄飛セントスル少年諸子ニ對メハ適當有益ナル書類ノ出版割合ニ少ナク完全ナリ無欠ナリト云フモノ幾何モアルベカラズ山縣

君ノ第一着ニ此必要ヲ感シタル亦宜ベナラズヤ圖書館ノ開設、學資ノ補助、寄宿舍ノ建築又皆小年諸君ヲ愛スル熱情ヨリ書類ニ次デ自然ニ來ルベキ要務ナルベシ退ヒテ出來星私立學舍ノ有様ヲ看ヨ廣告ヲ餌ニシ看板ヲ大ニシ氾リニ束脩ヲ求メ尚ホ且ツ校費ヲ貪ボル此ノ如キモノ蓋シ十中ノ六ヲ以テ數ヲ此輩ニ托スルニ吾ガ親愛ナル良家ノ子弟ヲ以テス豈恐レテ畏レザルヲ得ンヤ……山縣君アリ……山縣君アリ……而シテ仙鄉學人ハ拔ケ掛ケノ功名ヲ以テ名高キ人ナルニ茲ニ前途ノ豫告ヲ爲シタリ知ラズ何レノ日カ此實行ヲ目スヿヲ得シ否ナ居士ハ之ヲ學人ノ經歴ヨリ着々計畫準備スル所アリテ始メテ發表シタルモノナルコトヲ知ルナリ

○山田武太郎君

都之花
いらつめ

我邦ニ於テ初メテ言文一致体ノ文章ヲ瓶(ハシ)メ嶄然一機軸ヲ出ダシテ以テ二十世紀否ナ十九世紀文章家ノ爲メニ此一致体ナル摸範ヲ與ヘントスル者ハ美妙齋主人山田武太郎君其人ナリ君明治元年七月東京ニ生ル時ニ維新ノ戰亂未ダ靜定ニ至ラズ父山田吉雄氏(現今長野縣警部長タリ)軍ニ奥州ニ在リテ音信不通ナリケレバ齡ヲ重(カサ)ヌル迄尚ホ祖母ト母トノ手ニテ養育セラレタリ甫メテ四歲母ヨリ世界國づくしノ口授ヲ受ケ日々之ヲ暗誦シテ終ニ全卷ヲ記臆ス翌年阿母君ガ紙筆ノ遊戯ヲ嗜(タシナ)ムヲ見テ之レニ筆硯ヲ給シ試ミニいろはヲ授ク君ノ學ニ入ル實ニ此時ニアリ暫クシテ都路ニ移リ尋デ古今集ヲ習字シ實語敎童子敎及ヒ世界國つくしヲ讀ム六年始メテ寺子屋ニ入リ主トシテ習字ヲ修メ又タ孝經、大學、論語等ノ素讀ヲ終ル此時ニ至リテハ已ニ運筆自在讀方流如往々成人ヲシテ後ヘニ瞠着タラシムルモノアリシト云フ翌年轉シテ私立烏森校ニ入リ家庭ニ在ッテハ孟子、十八史略、元明史略ヲ讀ミ世界國づくしヲ講ズ八年十一月再タ公立巴學校ニ移リ在學五年毎チニ學力優等ノ廉ヲ以テ褒賞ヲ得タリ此年ヨリ別ニ日本外史、古文前集ヲ修メ次デ四書五經ニ移リ素讀ハ敢テ師ヲ求メズ字書ヲ蓄フルヲ好マズ又手帳ヲ製スルヿヲ欲セズ只記臆ニ依賴スルノミ故ニ書籍ヲ讀過スルコト此時ヨリ非常ニ多キヲ致シタリ十年文章軌範ヲ繙キ二週日ニシテ全ク終ル人怪(アヤシ)ミテ之ヲ驗セシニ即答一モ誤謬ヲ認ムルヿ能ハザリシカバ其人大ニ驚キ神童ノ歎聲ヲ殘シテ去リタリトヅ君又軍事ヲ好ミ暇アレバ即チ劍馬弓矢ノ遊戯ニ耽(フケ)リ殆ンド傷痍ノ跡ヲ絶(タ)ヅ此年ノヿナリキ同學ノ某生君ノ年少ナルヲ見テ常ニ嘲ケル君

忍ブコ數次人以テ怯懦トナス一日芝山内ニ散歩ヲ試ミ偶マ某生ニ遇フ某生例ニ依リテ嘲罵シテ已マズ君大聲赫怒獨樂ヲ以テ其頭ヲ激打シ流血淋漓顧ミズシテ去ル晩秋ニ至リ山僧法然ニ就キテ和文ヲ修ム十一年始メテ猿猴ノ圖ヲ見テ書事ニ感アリ斷然弓劍ヲ廢シテ密カニ繪畫ヲ事トス又好ンデ太平記及ビ平家物語ヲ讀ミ稍ヤ日本小說ノ門ニ近ヅク十二年秋期ヲ以テ小學全科ヲ卒業セリ然レドモ未ダ卒業試驗ヲ經ザルヲ以テ證書ヲ得ズ恬乎更ニ意トスル所ナシ曰ク予ハ證書ヲ得ンガ爲メニ苦學スル者ニアラズト翌年一月直チニ東京府第二中學ニ入リ曾テ學課ヲ修メズ只管和漢文學ト書事ニノミ日ヲ送リヌ此年始メテ常磐雪行詩アリ一路寒山暮色垂。寒風支笠伴三兒。誰言單旅無儀仗。白雪滿天源氏旗。ト又以テ其ノ文才ノ一端ヲ窺フニ足ル此頃ニ至リテハ小說ノ嗜好漸ヤク深ク大方ノ艸紙物語ハ君ノ眼光ニ接シタリ又常ニ祖父吉凰父吉雄等ノ作ニ係ル和歌ヲ品評シテ以テ無上ノ樂トナセリ此ノ如ク乳臭ノ時ヨリシテ文學ノ嗜好更ニ悛ダマラズ十四歳ノ時夙トニ一小說ヲ作リテ之レヲ學友ニ示シタルヿアリシト云フ其他別ニ記スベキ事ナクシテ三度ビ星霜ヲ迎ヘヌ茲ニ十六年七月ハ中學卒業ノ時期ナリシカドモ前一月東京大學豫備門ノ試驗ニ應セント欲シ毫モ卒業ノ用意ヲ爲サズ人或ハ先ヅ卒業證書ヲ得ンヿヲ勸ム聞カズ一意其試驗ニ應ジタリシガ不幸ニシテ登第セザリケレバ夫レヨリ明年六月ニ至ルマデハ門ヲ杜ヂテ敢テ明リゴ外出セズ書冊ト決鬪スルコト殆ンド一周歲再ビ其試驗ニ應ジテ遂ニ豫備門ニ入ルヿヲ得タリ然レドモ校課ノ意ニ充タザルモノアリテ不平自カラ禁ズルヿ能ハズ頻年恰モ病魔ノ戀愛スル所トナリ一日ノ安ナカリシヲ以テ退學ヲ果サズ十九年ニ至リ遂ニ決然一書ヲ遺シテ復タ校堂ヲ足ニセズ直

ナニ大學ニ入ラントノ志願ヲ起シ日々藥ヲ懷ロニシテ孤窃圖書館ニ赴キ手ニ從ツテ普チク書籍ヲ繙キ更ニ怠ルヿナシ此頃作リシ日課表ハ左ノ如シト

午前六時蓐ヲ離ル○七時マデ吟詠吹笛○七時ヨリ八時半迄和文學○九時ヨリ午後四時マデ圖書館ニテ文學專攻○四時半ヨリ六時迄英文學○六時半ヨリ十時迄哲學○十時ヨリ十二時迄小說詩歌

居士ハ盡ク之ヲ信ズルヿ能ハズ然レドモ居士ハ勉强家ヲ以テ學者ヲ以テ美妙齋氏ニ許ズ而シテ君ノ學力ノ大ニ進歩シタルハ此時ニアリ言文一致ノ原則ヲ發見シテ之ヲ實行セント企テタルモ亦此時ニアリト二十年六月大學ニ入ラント欲シテ其試驗ヲ請フ許サレズ强請再三ニ及ビタリシモ履歷正則ニアラザルノ故ヲ以テ遂ニ許可ヲ得ズ是ニ於テカ昔日ノ志望空シク灰ニ歸シ悵恨措ク能ハズ是レヨリ再タ閉居ノ「いらつめ」ヲ稿シ小說ヲ試ム二十一年金港堂ニ於テ小說雜誌都之花發刊ノ舉アルニ當リ君中根淑氏等ト進ンデ之ニ從事シ爾後大筆ヲ揮ツテ非常ニ盡力シタリシカバ一時ハ同誌ノ發賣高モ實際二万部ヲ超過シタリト云フ是レヨリ美妙齋ノ名漸ヤク顯ハル夫ノ夏木立ヤ武藏野ヤ蝴蝶ヤ已ニ世評ノアルアレバ畧シテ茲ニ贅セズ要スルニ君ノ經歷ニ付テハ俊才ト云フノ外別ニ喋々スル所ナシ君ノ筆力ニ於テハ美妙ト呼ンデ只ニ歎服スルノ外ナシ

居士ハ君ノ書而ヲ領セリ而シテ一致体ノ文章ニアラザリシ居士ハ文章第十七號ヲ繙テ君ガ紅葉山人ニ與フルノ書ヲ拜見セリ而シテ又一致体ニテアラザリシ之ニ依テ之ヲ觀レバ已ニ原則ト云フト雖ヒ其實用ニ至ツテハ高尙ナル枝葉ナル小說ニ限レルガ如シ知ラズ君ノ所謂原則トハ自カラ「小說ノ」ノ三字ヲ意味スルモノナルヤ否ヤ

明治十三年の春芝浦にて遠岸の櫻を望み坐ろに琵琶湖を思ひ出で、

さゞおみやひらのたかねの花ざかり
舟こゝろよどのしゞの大和田

寄衣戀

夏ごろもひとへよ人を思へども
うらおくわれよなれんともせず

初戀

みどりあが物言ひうむるたぐひよて
さだのよ物も言いれざりけり

ある隱者に書き送る

雲を　堰(せ)く　ごずゑ　風は　うめく。

笛を　吹く　月よ　山い　白し。

冬の　夜の　あいれ　かくて　ふのさ。

やゞて　谷を　擦(す)る　鹿の　聲。

○加藤政之助君

郵便報知新聞（報知社）

君安政元年埼玉縣下北足立郡瀧馬室村ニ生ル加藤唯右衛門ノ長男ナリ代々名主役ヲ勤ム君幼ニシテ鄕士ニ就キ漢籍ヲ學ブ年十四始メラ東京ニ上リ開成黌ニ入リテ專パラ英學ノ研究ヲ事トス幾バクモナクシテ戊辰ノ變ニ遭ヒ直チニ鄕里ニ歸ル偶マ父病アリ遂ニ翌年夏ヲ以テ九泉ニ客タリ乃ハチ其跡ヲ襲フテ戸長トナル而シテ當時君ノ村里ニ在ツテハ殆ンド文學ヲ研究スルノ校舍ナク甚ハダシキニ至ツテハ成童ニシテいろはヲ筆ニスルヿ能ハザル者アルヲ憂ヒ自カラ率先シテ英語學校ヲ創立シ大ニ子弟ノ就學ヲ奬勵セリ明治七年戸長ヲ辭シ翌年春埼玉縣學務課ニ出仕セシガ君ノ腦隨ハ一ノ學務課ヲ以テ滿足ス可キニアラズ年ヲ踰ヘズシテ其職ヲ解キ再タビ東京ニ來リテ慶應

義塾ニ入ル在學五年常ニ三田演説會ノ幹事タリ又民間雜誌ノ記者タルヿ殆ンド一年偶マ內務卿故大久保利通君ー刺客ノ暴殺スル所トナリ上下驚慌君乃ハチ同誌上ニ放言シテ曰ク「大久保ノ死何ゾ驚クニ足ラン我三千有余万ノ同胞ハ日々生死ノ運動ヲナシツヽアルニアラズヤ」ト福澤流ヲ氣取リシガ忽チ其筋ノ召喚ヲ受ケ御小言ヲ頂戴シ歸リテ之レヲ福澤先生ニ告グ先生ノ曰ク普通ノ道理ヲ書クヿ能ハザレバ寧ロ維誌ナキニ如カズ直チニ廢刊シタリト云フ十二年八月故五代友厚氏ノ招聘ニ應ジテ大坂ニ赴キ大坂新報ノ主幹トナル十四年五代氏等大坂ニ關西貿易會社ナルモノヲ起シ低價ニ北海道官有物ノ拂下ヲ請フノ擧アリ君大ニ驚キ馳セテ東都ニ歸リ知人ヲ會シテ之ヲ謀ル決議全ク反對ニ立タザル可カラズト云フニアリシヲ以テ再タビ大坂ニ赴ムキ直チニ五代氏等ト分離シテ同志者ト共ニ大演説會ヲ開キ痛ク

其衆ヲ非難シテ頻リニ反對ヲ試ミタリ此時ニ當ツテハ東京ニ於テモ亦大ニ攻擊說行ハレテ爲メニ政府ノ變動ヲ來タシ遂ニ輿論ヲ以テ之ヲ拒ミタリシハ偏ヘニ君ノ奔走盡力ニ依ルト云フモ敢テ過當ニアラザル可シ君尋テ大坂新報社ヲ鴻池善右衛門氏ヨリ讓リ受ケ純然タル立憲改進黨ノ機關ト爲シ箕浦勝人氏ト共ニ熱心銳意同社ノ事ニ任シ屹然トシテ關西ニ其黨勢ヲ張リ併セテ各地ニ遊說スルコト多シ十七年內幕喧嘩ノ故アリテ大坂新報ヲ廢刊シ更ニ大坂每朝新聞社ヲ創立シテ君自カラ社務ヲ總ベ盛ンニ事業ノ擴張ヲ計リ政府ノ政黨撲滅反對黨ノ攻擊ニモ關セズ截然改進黨派關西ノ牙城ヲ守ル而カク奮發卒勵スルト雖ドモ黨勢遂ニ大ニ衰ヘ孤城落日再タ支フ可カラザルニ逼リ止ムヲ得ズ十八年五月ヲ以テ同社ヲ東京ノ本丸郵便報知新聞ニ合併シ殿シテ東京ニ引揚ゲシハ見苦シカリケル次第ナリ爾來專パラ報知新聞記者トナリ益々改進主義ヲ擴張シテ大ニ爲ストコロアラントス其ノ間昨年改進黨ノ大會ニ於テ同黨ノ事務委員ニ當選シ本年ノ大會ニ於テモ復タビ選任セラレタリ又タ昨年明治倶樂部ノ創立ニ當リテ其幹事トナリ本年モ同樣當選セリ

遡ボリテ君ガ鄉里埼玉縣ノ縣會ニ於ケル經歷ヲ摘記スレバ明治十三年始メテ縣會議長ノ椅子ヲ占メ同年末備荒儲蓄法ノ臨時會議ニ際シ遠ク大坂地方ヨリ歸縣シ主トメ現米儲蓄法ヲ非難シタリ然モ個ハ是レ一大重要ノ問題ニ屬スルヲ以テ辨難攻擊論議百出容易ニ議決ヲ見ルニ至ラザリシガ遂ニ其說行ハレテ公債正金儲蓄ノ二ニ決シ爲ニ大ニ管下ノ經濟ヲ利セリ十五年同縣會副議長補欠ノ選擧ニ當選シ次デ議長ニ選任セラレタリ爾后三回ノ改選期ヲ經タレドモ尙ホ依然トメ其任ニ就ケリ彼ノ一時世人ノ注意ヲ惹起シタル埼玉縣廳移轉ノ騷ニ

付テハ或ハ深夜腕車ヲ飛バメ東台山下ニ東天ノ紅ナルヲ望ミ或ハ曉宵意見書ヲ懷ニメ内務次官ニ移轉ノ非ナルヲ說ク等最モ力ヲ致タリ著譯ハ日本之政略、改進論、回天奇談、西洋穴探等アリ

居士ハ數年以前井生村樓ニ於テ君ノ演說ヲ拜聽シタリ否ナ君ノ辨舌恰カモ五六歲ノ小兒ガ小學ノ唱歌ヲ學ブト一般目立ナテ聞苦シカリケレバ聽衆ノ爲メニ妨ゲラレテ殆ンド聽クコトヲ得ザリキ當時窃カニ謂ヘラク改進黨ノ輩ハ皆自分免許多クシテ到底事ヲ爲スニ足ラズ此訥辨者流ヲ以テ演壇ニ登ル唯其自負心ノ强キニ驚クノミ而シテ本年ノ改進黨大演說會ニ於テ久シ振リニテ復タビ君ノ演說ヲ聽ク其辨舌上乘ニアラズト雖ドモ曩キニ訥辨ノ爲メニ妨害ヲ受ケテ自說ヲ陳ブルヿ能ハザリシニ比スレバ霄壤モ啻ナラズ又ナラザルノミナラズ時ニ熱情ノ溢レテ大ニ秀逸ナル所ノモノアリタリ

居士ハ君ノ辨舌ノ熱心ニヨリテ上達シタルモノナルコトヲ知ルナリ而シテ此經歷ヲ嚙ンデ君ノ總テ熱心家ナルヿヲ知ルナリ而シテ又此經歷ヨリ推シテ君ノ前途ノ事業モ必ラズ熱心ニ成ルヿヲ知ルナリ

○三宅米吉君　文

君万延元年七月ヲ以テ和歌山縣下和歌山ノ城下ニ生ル父ヲ三宅榮充（現今高崎治安裁判所長タリ）ト稱ス幼ニシテ專パラ家學ヲ爲シ十一歲ノ春始メテ學舍ニ上リ同級生徒ノ皆己レヨリ年少ナルヲ見大ニ發奮シテ一意學業ニ從事セリ翌年東京ニ來リテ慶應義塾ニ入リ切瑳螢雪勉强家ヲ以テ稱セラル三度ビ春秋ヲ迎ヘテ將サニ同塾卒業ノ證書ヲ得ントス會マ嚴父官ヲ拜シテ新潟ニ赴任スルヿトナリヌ君之レニ隨行シテ新潟ニ赴ムキ新潟英語學校ノ教員トナル年ヲ越ヘテ同校廢セラルヽニ及ビ新潟學校百工化學科ノ助手トナリ英語ヲ教授スルノ旁ハラ主トシテ理化學ノ研究ニ從事セリ暫ラクシテ分析術及ビ百工製造法ヲ實驗シ頗ブル好結果ヲ得タリ居ルコト三年同校ノ監事トナル

十九歲ノ春新潟學校ヲ辭シテ再タヒ東京ニ來リ舊主德川茂昭公ヨリ歷史ニ關スル書籍ノ借讀ヲ爲スコト久シ翌年千葉縣師範學校ノ招聘ニ應シ赴テ同校ノ教師トナル明治十五年東京師範學校教諭ニ任ゼラレ重モニ英學科ヲ担當シ兼チテ同校附屬小學ノ監督タリ此間ニ於テハ職トシテ教育學教授法ノ研究ヲ爲シ並ヒニ同校所藏ノ史籍ヲ渉獵スルコト甚ハダ多シ又當時ニ於テ日本史學提要第一冊ヲ公ケニシ日本人種ノコ及ヒ歷史以前ニ遡リテ大ニ推論スル所アリ後チ復タ師範學校教頭後藤牧太氏ト共ニ簡單物理試驗法ナルモノヲ著ハス本書ハ極メテ簡單ナル材料ヲ以テ物理學上ノ試驗ヲ施スノ法ヲ丁寧ニ解說セルモノナリ當時ハ恰カモ仮名の會ノ設立騷ギニテ隨分八釜敷キ議論ノアリタル頃ナリキ君ハ曩キニいろは會ナルモノヽアリシ頃ヨリ引續ヒテ非常ニ贊成盡力スル所ナリシカバ此書ノ文章ハ都ベテ假名

文字ヲ用ヒ一切君ノ起艸シタルモノナリト云フ十九年七月書肆金港堂ノ委托ヲ受ケテ歐米各國書肆業務上ノ模様及ビ普通教育ノ有様等ヲ視察センガ爲メ先ヅ米國ニ向ツテ出發シ尋デ歐州各國ヲ巡回シテ精密ナル調査ヲ遂ゲ前后一年半ニシテ歸朝ノ途ニ就キタリ在外中ニ在ツテハ金港堂ヨリ習字教授案並小學歴史編纂法ヲ公ニシ何レモ好評ヲ得タリ爾來金港堂ノ懇托ヲ無ニスルモ本意ニアラズ君モ亦大ニ見ル所アリテ專パラ金港堂ノ圖書編輯事務ニ盡力シ又教科用書類ノ編輯ニ從事セリ是レヨリ先キ明治十九年中ニ於テ金港堂主人原亮三郎氏ト謀リ特ニ金港堂編輯事務所ヲ設立シ自カラ同所ノ監督トナリテ益々事業ノ擴張ヲ計レリ目下ハ編輯人、書工、事務、寫字生等二十余名アリテ教科書ノ編輯、諸書艸稿ノ校正若クハ買入レノ業務ヲ營ミ(イトナ)追々盛大ニ赴カントスルノ勢ナリ君又近年ニ至リ文學ニ關スル雜誌ガ一

雨毎ニ增加スルニモ拘ハラズ一度ビ眸(ヒトミ)ヲ屬スレバ復タ閲讀スルノ價値ナク或ハ文學雜誌ノ名義ヲ以テ時ニ政事上ノ論説ヲ掲ゲ吾ハ學者ナリト自尊シ恬トシテ憚ル所ナク或ハ全ク利己主義ニ成リテ眞成ニ熱心ニ信切ニ我文學ヲシテ隆盛ノ域ニ達セシメ我同胞ヲシテ此温和ナル樂ミヲ享(ウ)ケシメントノ目的ヲ有スルモノ甚ハダ尠少ナルヲ憂ヒ遂ニ昨二十一年七月ヲ以テ文第一號ヲ發行シ自カラ其編輯ノ勞ヲ取リテ盛ンニ唱導スル所アリ

嗚呼我愛スル所ノ文ヨ汝ハ文學社會ノ氣象蠚ナリ寒温器ナリ汝益々盛ナレバ以テ我文學ノ隆盛ニ赴クヨトスベク汝衰ヘレバ又以テ我文學ノ退歩ニ就クヨトス可シ汝ハ我文學ノ現象ナリ

○饗庭與三郎君

篁村先生之傳

讀賣新聞（日就社）

饗庭篁村自記

安政二年八月十五日下谷龍泉寺町に生る當年とつて三十五歳これ暦數の上の俗勘定にして全く當人は左樣お年にあらず確かに十五か或ひは十六の積りあり質屋の若旦那にして無事に居れば今でも若旦那あるべきよ幼きより青雲に上り桂枝を折らんの野心あり九歳にして始めて白縫物語を讀み蜘蛛の奇術を行はんことを願ひ十歳にして兒電也物語を讀み中田甫に啼く蛙も懷かしく覺へたり十一にして同業質屋の小僧となり番頭さんに就て算術を學び二一天作の五だけは會得しせがチッカラ面白くおきゆゑ斯樣な事は兵卒の役あり大將たる者は學はずして可なりと見切り貸本屋の預け行く荷を解いて繪入通俗三國志を讀み天下に關羽と張飛なきを憾みとし水滸傳に移りては我は天岡星の中あらんと思へり十二朝軍談武王軍談だん〳〵學問增長して番頭若い衆を甘がり凡慮の及ぶところにあらずと濟ませり八犬傳一冊を天保錢一枚づゝと極めて番頭殿に讀みて聞かせ一日に三冊强ひつけて番頭に頭を搔かせ其賃を持つて繪艸紙屋へ駈けつけて芳幾氏の源氏の見立芳年氏の百物語をはじめ役者繪も豐國の奉書摺おゞゝ酒落兄姉を口說き母親をせびり伯父にねだりて皆お錦畫に入れ上げたれど今において人形の首も書けず書は饗庭流とて一流を立つるほどあり左れど小僧にしては碁を强く打つと褒められて國枝觀光とかいふをひねくり藥鑵天窓を沸立たせて高慢を云ふを樂みとし使ひに出れば口上は忘るゝかはりに七色唐辛子屋の云ひ立てを暗誦し隨筆物を讀んで鈴虫と松虫の違ひを論じ梧窓漫筆を種に講義をは

じめて若年寄の異名を得たり斯かる才子あれば成長して學問該博知つたかぶり親族中第一等の學者とおり兄も感心して横文字を習へと勧められしが其ところ志學の年にして鎖國攘夷論者あれば横文字などは汚らはしとして習はざりし嗚呼此時より洋學を心がけおば大學總長の椅子を他人には假すまじきにと今では悔ゆるあり十七の年中の兄を喪ひうの悲歎の止みがたきと我家の系圖中に元三大師と崇めらるゝ慈惠僧正あれは坊主にありて世間の者を駭かさんと終に眞言の寺よ投じ阿字觀の窓の外には眞如實相の月あきらかに求聞持の床の上には佛智圓滿の花を降らし既に艶かなる翠の髪を薙ぎ捨てゝあらけおき麻の衣を身に纏はんとせし時にあたり魔障いまだ除かれずして女人戀愛の絆に縛され坊主大きに否やにあり寺を逃げて諸方を流涙し何んでも大學者にありて世間の者をヘコませんと暗雲に本を讀

みしが或る時小遣に困りて辻占の中へ入れるド、一を二十作りて一、朱取りしが抑も今斯の如く大著述家とあり短章一文十圓より安からず小説一篇千圓でおけれは筆を執らぬといふまでにありし因緣あり是れより涙のまに〳〵ゆられ流れて終に讀賣新聞日就社に聘され(ではおく頼み込み)月給二圓五十錢を頂戴せしが幸ひにものらくらとして芝居ばかり見たがりし災ひが役に立ち此樣な者も入用ありとて參圓五拾錢と上り五圓と飛びやがて堂々たる新聞記者とおりぬ斯く大したる履歴あれど人知らず密かに小説的の艶話あれどまた知られず學識此の如くなれど人感伏せず文才此の通りあれど我が自から定めたる價を出だして頼む者おし何ぞ天下輿論の善を許すに吝あるや世人殘らず善物を善きと知る鑑識おきか夫れとも矢張此方が鈍か思へば昔し子供のうち神童と稱せられたこともありゾコデ今は鈍と變り

しか併かし神にして一變鈍と化す以上は鈍また化して神とあらずとも云へず今や閑散無事の身となり金もまた滿とあり是れから大勉强に勉强せは神妙不思議古今獨歩の其の大學者とならんも知れず又あらず仕舞かも知れず其時には誰も我傳記を世に現はして呉れまじと大屋氏が催しを幸ひとして自から篁村先生の傳を作る先生姓は饗庭提灯屋は間違へて鄕食庭の三字とし友達も早書に饗應と書きやいばさんと呼はれきやうばさんと稱せらるゝ何でも通用すればよい面向不背ハイ〳〵と返事をするを以て温厚の君子たるを知るべし宜あり同業の諸賢これを稱して聖人と云ふや名は與三郎号は篁村是れ竹村何某方に里にやられ乳を呑みたる母の恩を忘れぬ爲めなりそれから竹の舍ともいふ龍泉町の生れて其所に住みたるゆへ龍泉居士と云ひ其縁で太阿居士とも号せり是ではやいばさんと呼はるゝも無理

あらずとんだ鈍刀なり）一時南傳馬町二丁目に住て南傳二とも云ふ出鱈目の名倘は多し常に俳句を好めど古池や流にあらず檀林風を吹きかへす中興の開山なりとの評判あるやにはのかに聞く或は然るべし

陽炎や退けば我居たあたりにも

チョイと見本がこんなもの僅々文字のうちに景あり情あり寓意あり俳句も斯くゆくと刈髪床のものでないテと大いに賞贊する者は誰ぞと思ひしに矢張是れも自からなり此に寫眞を掲げて我が眞相を知らせんと思ひたれど坊間ひさぐ所の俳優成駒屋福助なる者の寫影と眼口のあり所なぞ大に似たるところあれば冗な手數を厭ひて此に出ださず

○日下部三之介君

君安政三年十二月ヲ以テ福島縣下二本松ニ生ル父ハ義正母ハ日下部氏代々藩士タリ明治二年鄉校ニ入リ始メテ學業ニ就ク然レドモ幼ニシテ戊辰ノ乱ニ遭ヒ流離顚沛頗ル艱苦ヲ嘗ム加フルニ家計甚ハダ貧シクシテ學資ノ供給ヲ得ズ父母モ亦君ヲ教育スル極メテ勞セリト云フ八年漸ク福島師範學校ニ入リ刻苦勵精一意讀書ヲ事トス幾バクモナクシテ業ヲ卒ヘ同縣下ノ小學教員トナル十年一月大ニ感ズル所アリ即チ鄉閭ヲ辭シ東京ニ上リテ小學ノ教務ヲ採リ餘暇ヲ以テ教育經濟、法律等ノ諸學ヲ研究シ得ル所多シ十二年冬東京師範學校教員トナリ年ヲ越ヘテ府下郡部ノ巡回訓導トナリ或ハ小學校長トナリテ熱心鋭意非常ニ黽勉シタリシカバ效績大ニ舉ガル茲ニ於テカ東京府君ガ職務勉勵ノ功ヲ賞シテ若干金ヲ付與セラレ文部省亦其ノ功勞ヲ嘉ミシテ四等賞ヲ下付セラル此時ニ當リ君大ニ教育家團結ノ必要ナルヿヲ主張セシガ偶マ東京府教育會並ニ大日本教育會ノ設立ニ逢ヒ奮ッテ之レガ經營ニ與カリ奔走盡力スルヿ甚ハダ少ナカラズ十七年七月文部省ニ出仕セシガ十九年ニ至リ非職ヲ命ゼラレテ大日本教育會理事トナリ會長辻新次氏ヲ助ケテ專パラ同會擴張ノ事業ヲ担任シ奏功頗ル多シ翌年三月別ニ計畫スル所アリテ同會ヲ辭シ次デ文部省ヨリ復職ヲ命ゼラル然レドモ君ハ獨立ノ教育事業ヲ起サント欲スルノ志勃如タリシカバ程ナク辭表ヲ奉呈シタリ此時職務勉强ノ廉ヲ以テ文部省ヨリ賞金若干ヲ下賜セラル又大日本教育會ヨリモ會務經營ノ勞ニ酬ハンガ爲メ金貨若干花瓶一對ヲ贈與シタリト云フ遡テ君ガ解職ノ因テ來リタル所以ヲ摘記スレバ是レ亦教育社會ニ盡スルノ已ムヲ

得ザルニ出デシナリ君ハ曩キニ東京師範學校ノ教員タリシ時ヨリ夙トニ教育ニ關スル好雜誌ナキヲ遺憾トシ十二年八月ヲ以テ教育月報ナルモノヲ發行セシガ資金繼ガザルノ故ヲ以テ久シカラズシテ休刊シ次デ十四年ニ至リ教育旬報ト改題シテ再ビ發行シタリ而シテ資金又給セズ家什ヲ鬻ギテ以テ其費用ニ充ツ然レ𪜈遂ニ支フル能ハズシテ廢刊セリ十八年再ビ前志ヲ繼ギテ東京教育社ナルモノヲ創立シ四月上旬ニ於テ教育報知第一號ヲ發行セリ而ガルニ當時君ハ在官中ナリシヲ以テ十分ニ社務ヲ裁スルコト能ハズ從ツテ兎角盛大ノ擧ヲ看ルニ至ラザリシカバ遂ニ二十年三月ヲ以テ斷然文部省ヲ辭シタルナリ爾來專パラ同社ノ事務ニ從テ此年教師之友並ニ貴女之友ヲ增刊シテ大ニ教育ノ改良ヲ計レリ是レヨリ同社ノ事業モ頗ル緒ニ就クニ至リタリト云フ二十一年更ニ教育及政治ト名ヅクル雜誌ヲ發刊シ後

チ時事公論ト改稱セシガ一歲ニ滿タズシテ廢刊セリ

君ハ少壯ノ頃ヨリ余程議論好キニテ教育令改正ノ件ニ付元老院ヘ學士會院ノコトニ付文部省ヘ教員取扱ノ件ニ付東京府知事ヘ國家教育施設ノ件ニ付故森文部大臣或ハ榎本文部大臣ヘ其ノ他教育ノ要件ニ關シ當路者ニ對シテ面陳建白シタルヿ擧ゲテ數フ可カラズ又曩キニ東京教育社ニ於テ教育十二大家ノ投票ヲ求メタルヿアリシガ君ハ教育新聞記者トメ最高點ヲ得タリ君又教育書類ノ著述ニ熱心セリ就中國家教育策ノ如キハ最モ世論ヲ動カシタルガ如シ只非常ニ文字ニ拘泥シタルヲ以テ讀者ヲシテ怡カモ文章軌範ヲ繙ク(ヒモト)ノ思ヒアラシム然レ𪜈卷首ニ於テ著者自ラ言ヘルヿアリ曰ク「余ノ此書ヲ編スル敢テ奇言ヲ弄ブニアラズ敢テ奇論ヲ好ムニアラズ唯讀者ト共ニ國家教育ノ方鍼ヲ定メントスルニアリ」ト眞ニ此書ノ成ル時勢ニ迫ラレテ已ムヲ

得ザルニ出デ文章ノ如何ヲ慮ルニ遑アラズシテ偏ヘニ國家主義ノ教育ヲ普及セシメント熱望スルモノナルヿヲ知ルニ足ルナリ

目下ハ東京府教育會議員兼理事、大日本教育會議員兼常置委員、日本弘道會常議員タリ且ツ昨二十一年ヨリ書籍出版組合委員ニ選バレ次デ東京商工會員ヲ兼ス。

經歷此ノ如ク紛雜ナリ……教育社會ニ奔走スル此ノ如ク多キナリ居士ハ姑ク君ガ事ヲ執ルノ巧拙ヲ論ゼズ單ニ「熱心」ノ二字ヲ以テ之ヲ賞揚セントス宜ナリ世人ノ口碑ニ次ノ數文字ヲ印スルヤ「在野教育家ノ泰斗」

○吉田熹六君

朝野新聞

君姓ハ吉田名ハ熹六号ヲ鞘庵ト云フ萬延元年德島縣阿波國名東郡南新居村ニ生ル家ハ代々農ヲ業トシ傍ハラ藍商ヲ爲セリ君幼少ノ頃ヨリ頗ブル農事ヲ厭ヒ曾テ耒耜ヲ肩ニセズ七歳ニシテ學ニ志シ始メテ寺子屋ニ入ル叔父志摩利右工門氏ハ國内屈指ノ豪商ニシテ義俠濶達ノ名遠近ニ聞ゴユ君ノ幼ニシテ學ヲ好ムモ家貧ニシテ到底十分ノ教育ヲ受ケシムルコト能ハザルヲ憫ミ遂ニ十一歳ノ時養ッテ子トナシ德島ニ留學セシム君大ニ喜ビ勵精勉强シテ常ニ最高位ヲ占メタリ傍ハラ漢學家柴秋邸ノ門ニ遊ビ漢籍ヲ學ブ四度ヒ春秋ヲ閲ミシ明治八年前期ヲ以テ小學全科ヲ卒業セリ此ノ時ニ至ッテハ修學ノ志益々深ク切ニ東都ニ遊學セント請フ甘諾ヲ得、早速笈ヲ負フテ東京ニ上リ一

日ヲ隔テ、慶應義塾ニ入學シ始メテ英學ヲ修ム當時屢バ學堂尾崎氏等ト共ニ曙新聞ニ投書シ以テ無上ノ樂トナセリ君又塾監講師等ガ往々專制ノ舉動ヲ爲シテ艱苦ヲ學生ニ與フルヲ怒リ躬ヅカラ筆ヲ執リテ塾中新聞ナルモノヲ編輯シ二三ノ同志者ヲ集メ數十枚ヲ謄寫シテ之レヲ塾中ニ配布シタリ塾監聞テ大ニ憤リ再三説諭ヲ加ヘタリト雖モ君常ニ抗辨シテ肯ンゼザリシカバ遂ニ幹事局ヨリ召喚ヲ受ケ非常ニ譴責ヲ受ケタリト云フ居ル二周歳放蕩ノ廉ヲ以テ退塾ヲ命ゼラレ後悔臍ヲ噬ムモ亦奈何トモスルコト能ハズ悄然トシテ歸國ノ途ニ上ル志摩氏大ニ之レヲ怒リ復タ書冊ヲ手ニスルヲ許サズ丁稚小僧ノ群ニ入レテ日夜藍商ノ事ニ奔走セシム十一年米澤ノ支店ニ出張ヲ命ゼラレ已ムナク牙籌ヲ手ニシテ離騷業ニ從ガフ滯留年餘不平愈ヨ增長シテ自ラ禁ズルコト能ハズ再ヒ遊蕩濫費ヲ始メタリシカバ忽チ呼戻

サレテ空前絶後(君ニ取ッテハ)ノ嚴責ヲ受ケ即チ昂然抗辨メ曰ク「大爺ノ兒ヲ養フモノ素ト兒ガ志學ノ念ニ篤キヲ以テノ故ニアラズヤ而メ今責ムルニ商業不勉强ヲ以テス兒ハ到底之ニ心服スル能ハズ敢テ叩謝スル所ナシ志摩氏竟ニ其志奪フ可カラザルヲ知リ父子ノ緣ヲ絶チテ間接ニ力ヲ添ヘンコトヲ約ス君元ト長男故ヲ以テ父母却ッテ之レヲ喜ビ直チニ歸村シテ家事ヲ助ケンコトヲ勸ム應ゼズ曰ク「是レ余ガ素志ニアラズ」ト父母ヲ阿弟ニ托シ飄然去ッテ德島ニ赴キ竹内某ノ家ニ寄食シ經ヲ寫シテ機カニ糊口ノ料ニ充ツ零落此ノ如ク極マレリト雖モ天豈俊才ヲ捨テンヤト幾干クモナク普通新聞社ニ招聘セラレテ主筆記者トナリ巧ミニ快活ナル一枝ヲ弄シテ盛ンニ計畫スル所アリキ暫ラクシテ十四年ノ政變湧出シ朝野騷然君此機會ニ乘シ各郡ノ有志者ヲ結合シテ到ル所各地ニ演説會ヲ開キ慷慨悲憤ノ説ヲ吐テ頻リ

ニ人心ヲ聳動シタリ翌年改進黨ノ東京ニ起ルヤ君主トシテ德島立憲改進黨タルモノヲ組織シ時ノ縣會議長阿部興人氏等ト奮ツテ盡力周旋セシカバ同黨ノ勢援日ニ加ス々々盛ナリ縣令甚ハダ之ヲ憂ヒ百方撲滅ノ方策ヲ運ラスト雖ヒ毫モ黨勢ヲ傷ツクルニ至ラズ時ニ書記官大越亨新タニ任ニ該タリ果斷ノ所置ヲ以テ改進黨ヲ壓伏セントスル新聞社長ニ過ルニ若シ吉田ヲ退クルコト能ハズンバ以后布告印刷ノ御用ヲ命セザル旨ヲ以テス實ニ一社安危ノ因テ分ル、所ナリ君茲ニ於テ勢ヒ已ムコトヲ得ズ去ツテ藍商取締會社ニ入リ間モナク副頭取ニ上任セリ而シテ改進黨ノ爲メニ運動スル舊ノ如シ後チ所思アリ半歲餘ニシテ職ヲ辭ス十六年孤劍漂蓬再タヒ東京ニ出デ二三ノ親友ト居ヲ墨堤ニ占メテ獨修獨學得ル所多シ此年報知社ニ入リテ專ラ論說ヲ草シ又明治協會雜誌ノ編輯ヲ担任セリ越ヘテ十七年新潟新聞ノ招

聘ニ應ジ箕浦勝人氏ノ後任トナリテ主筆記者タルヿ殆ンド二年大ニ時事ニ感アリ十九年春ヲ以テ遠ク歐米漫遊ノ途ニ上リ佛國ヲ經テ英國ニ赴キ倫敦ニ滯留スル八閱月時ニ矢野文雄氏歸朝シテ報知新聞改革ノ事アリ電報ヲ飛バシテ頻リニ君ノ歸朝ヲ促ガス乃ハチ大西洋ヲ渡リ米國ヲ去リ渺望數旬歸リ來ツテ直ニ報知新聞ニ從事ス夏秋ノ交ニ至リテ條約改正ノ問題出デ人心恟々タリ君固ト宿論尺胸ニ溢ル尾崎、大石ノ諸氏ト屢バ演說會ヲ開キテ盛ンニ激論ヲ唱ヘタリシカバ頗ブル當局者ノ注目スル所トナレリ折リシモ關西鐵道會社四日市ニ起リ大坂鐵道會社ト線路ノ事ニ關シテ一大紛爭ヲ惹起セリ君在京關西鐵道會社株主ノ依賴ニ應ジ其惣代委員トナリテ同年十月大津ニ赴キ屢バ京坂ヲ往來シテ創立委員ト共ニ奔走盡力シタリ始メ君ノ東京ヲ出發スルニ當ツテヤ數名ノ秘密探偵常ニ君ニ尾シテ其舉動ヲ窺フ君

之レヲ知リテ苟且ニモ政治ニ關スル論議ヲ爲サヾリシカバ首尾能ク同年末ノ保安條例ヲ免ルヽヿヲ得タリ二十一年二月ニ至リ両社ノ紛議全ク終局シテ關西鐵道會社ノ全勝ニ歸セシハ君ノ功勞甚ダ多キニ居ルナリ四月内閣ノ本免狀ヲ得テ本社ヲ四日市ニ創設スルニ及ヒ選バレテ常議員トナル然レトモ君ノ一身ハ擧ゲテ商工業ニ委スベキニアラズ同社ノ事務大畧整頓スルヲ俟チ決然去ツテ東京ニ歸リ直チニ朝野新聞ニ入ル爾來今日ニ至ル迄犬養氏等ト共ニ勵精鉛塹ニ從事セリ

著譯書ハ輿論公議、市制町村制評論英國地方行政論、奸雄之末路、憲法論等ナリ

君ハ未ダ曾テ官海ニ遊バズ終始營々トシテ民間ノ事業ニ奔走セリ居士ハ最モ君ヲ敬慕スル者ナリ嗚呼君ハ愉快ナル經歷ヲ有スル人ナル哉居士ハ筆ヲ執ルニ臨ンデ一字一句寒心セズバアラズ

印度洋舟中　　韜菴居士

打枕濤聲夢不間。船窓無物慰愁顏。江湖氣習餘豪宕。筆舌生涯慣患難。濶水烟迷印度海。微雲月晴阿丁山。歐洲此去應非遠。檣影糢糊蘇士灣。

秋夜在英都寄懷日本諸同人

秋聲落木有餘悲。默數歸期更幾時。万里山河書少達。一燈風雨夢唯知。客中誰作同心伴。海外空吟紀勝詩。回首舊遊何處所。長天如水白雲垂。

卜居

新結黄茅屋一椽。接遲暫此謝塵緣。韜才人抱連城璧。賣字誰徵誄墓錢。狂語儘能罵世態。狷生未必乞人憐。由來得失何須問。捫蝨南軒對碧天。

偶成

高臥關門百慮清。操觚齊裡物華更。人生節義千金重。世上榮枯一葉輕。劍

挾秋霜扶病骨。酒如春汐湧吟情。醉來斫地空慷慨。不向茫々萬古名。

○戸城傳三郎君

君ハ万延元年六月ヲ以テ福島縣下二本松藩ニ生ル舊二本松藩戸城安敬ノ子ナリ幼名ヲ肅太郎ト云フ幼ニシテ戊辰ノ亂ニ逢遭シ艱苦ノ中ニ成長セリ十歳ノ時甫メテ學ニ就ク家貧ニシテ資ノ給スベキナシ母陶器畫ヲ畫ガキ其ノ賃ヲ以テ漸ヤク紙筆墨購求ノ料ニ充ツ然レドモ得ル所固ヨリ僅少ノ額ニ止マルヲ以テ迚モ書籍ヲ購フノ補トナスニ至ラズ父乃ハチ他人ノ書ヲ借リ日ニ數葉ヲ寫シテ之レヲ與ヘラレタリト云フ其刻苦ヲ積ミ學業ニ從事スルヿ畧ボ此ノ如シ眞ニ歎服ノ外ナキナリ年十五(明治八年)稍ヤ經史ニ通シ更ニ進ンデ英學ヲ修メント欲ス阿父君ニ問フテ曰ク汝此貧苦ヲ顧ミズシテ尚ホ學業ニ從ハント欲スルカ對ヘテ曰ク兒ノ學ヲ修メント欲スルモノ即チ我家ヲ思フナ

リ兒ハ一生ヲ終ルマデ書籍ト相離ルヽヿヲ欲セザルナリト父母モ益々望ミヲ屬シテ敢テ其志ヲ奪ハズ翌年二月漸クニシテ福島縣立英語學校ニ入リ始メテ英書ヲ繙ク切瑳琢雪曾テ光陰ヲ徒消セズ又濫リニ外出ヲ爲サズ貧窮家ヲ以テ勉强家ヲ以テ校中ニ冠タリ足掛(アシカ)ケ三年十七歳ニシテ始メテ小學敎育ニ從事ス然レドモ當時未ダ身ヲ敎育ニ委スルノ意アラザリシカバ幾バクモナク辭シテ東京ニ來リ漢學並ヒニ英學ヲ修ム十二年三月病ニ依テ鄉地ニ歸リ再タビ小學敎育ニ從ガウ茫再茲ニ三春秋十五年文部省各府縣ニ令シテ師範學科取調員召集ノ事アリ君乃チ選擇セラレテ福島ノ派出員トナリ上京シテ東京師範學校ニ學ブ越ヘテ十六年卒業シ直チニ福島師範學校敎師ニ任ゼラレ主トシテ附屬小學ノ管理ヲ爲セリ此時ニ當リ我邦ニ於テ始メテ心性啓發主義敎育法大ニ行ハレントス是ヲ以テ各府縣爭フテ敎員講習會ヲ

開キ以テ敎育學敎授法等ヲ傳習セシム君又講師ノ一人トシテ此會ニ臨席シタルヿ數多シ此年君發起シテ有志者ト謀リ福島縣敎育會ナルモノヲ創設シテ非常ニ幹旋シタリシカバ引續キ其幹事ニ選バレ專パラ雜誌編輯ノ事務ヲ幹理シテ盛ンニ計畫スル所アリ十九年一月同縣下須賀川小學校長ニ任ゼラル君ガ同校ニ入リシモノハ實ニ士人ノ熱望默止(モクシ)シ難キニ出デタルナリ故ヲ以テ君モ亦銳意校務ノ改良ヲ計リ效績甚ダ見ルベキモノアリ同校在職中ニ於テハ率先シテ岩瀨敎育會(須賀川ハ岩瀨郡ニ在リ故ニ名ヅク)ヲ起シ次デ其會長ニ推薦セラレタリ此年東京敎育社ノ聘ニ應ジテ上京シ主トシテ敎育報知ノ編輯ヲ掌(ツカサ)ドリ兼チテ貴女之友ノ編輯ヲ監督セリ此時ヨリ君ノ名聲漸ヤク顯ハル本年一月東京敎育社ヲ辭シ躍然奮發シテ山縣悌三郎氏等ト謀リ東京敎育新報ナルモノヲ刊行シ大ニ世人ノ賞讃ヲ得タリシガ是レヨリ先

キ他ニ似寄リタル題目ノ教育雜誌アリタルヲ以テ且ツ又教育ニ關スル事柄ニシテ急報ヲ要スルモノナシト云フベカラザルヲ以テ問モナク教育週報ト改題シ益々教育ノ改良ヲ促シ社運モ亦日ヲ追テ隆盛ノ域ニ達セントスルモノヽ如シ要スルニ君ハ今日ヨリ以後此雜誌ニ全力ヲ盡シテ教育社會ニ雄飛セントスルモノナリ居士ハ二十三年以后ノ教育家トシテ教育社會ニ一將校ヲ得タルヲ喜バズンバアラズ又大日本教育會議員兼常置委員タリ

著書ハ簡易科讀本、作文教授法等ナリ

○瀧本誠一君

東京公論

君安政五年麻布龍土ノ宇和島藩邸ニ生ル九歲ノ春阿母ニ從ツテ豫州宇和島ニ移リ藩校明倫館ニ入ル幼ニシテ學ヲ好マズ曾テ筆硯ヲ以テ遊戲ノ具ト爲シタルヿナシ然レ𪜈好ンデ通俗三國誌ヲ讀ミ日ニ兒童ヲ集メ自カラ大將トナリテ攻城守戰三國誌ヲ實演シテ無上ノ快樂トナセリ父母之レヲ憂ヒ嚴責鞭苦スルト雖𪜈少焉クニシテ即チ舊トノ如シ師傅モ亦如何トモスルヿ能ハズ頗ブル其奬勵ニ苦シミタリト云フ十六歲ニシテ父ヲ失フ父名ハ達、詩名夙トニ豫南ニ鍔タリ曾テ尊王攘夷ノ說ヲ唱ヘ時ノ輕薄兒ガ洋書ニ通ズルヲ名トシテ世人ヲ瞞着セントスルヲ惡ミ詩ヲ作ツテ曰ク「何物狡兒巧鴂舌。一年强半學蠻書」ト然レドモ其歿スルニ臨ミ君ヲ戒メテ曰ク乃父冥スルノ後ハ汝勉メテ洋

書ヲ研究スベシ今日ノ急務ハ海外ノ大勢ニ通ズルニアリト言訖リ溘然トシテ逝ク君茲ニ於テカ大ニ感奮スル所アリ慨然トシテ洋書ノ研究ヲ事トス明治六年君有志ト謀リテ宇和島ニ洋學校ヲ設立シ中上川彦次郎氏(今山陽鐵道會社長タリ)ヲ招キテ益々洋書ヲ修メ併セテ漢籍ノ必要ヲ感シ渉獵多キニ居ル幾干クモナラズシテ學業頓ニ進歩シタリシカバ年ヲ越ヘテ宇和島不棄學校ノ教師トナル九年笈ヲ負フテ東京ニ上リ愛宕下勧學義塾ノ助教トナリ次デ湯島共慣義塾ニ入ル未ダ半歳ニ至ラズ意ニ滿タザルモノアリテ決然鄉里ニ歸リ豫南學校ノ洋學教師トナル十年西南ノ變ニ際シ北宇和郡長都筑莊藏氏衆ヲ寺院ニ會シテ士族ノ方向ヲ協議シ人毎ニ意見ヲ問フ君聲ニ應シ進ンデ曰ク今日ノ事他アラズ正ニ與シ義ヲ援ケンノミ都筑氏笑ッテ言ハズ時ニ賊兵日向ニ出デ將サニ宇和島ニ渡リ土佐モ亦反旗ヲ擧ゲントスルノ風説アリテ人心恟々タリ折柄警視第一大隊來リテ宇和島ヲ警衛シ次デ賊勢モ亦タ幸ニ窘蹙シケレバ事遂ヒニ止ム翌年愛媛縣學制ノ改革ヲ行ヒ豫南學校ノ管理ヲ郡長ニ命シ郡吏ヲ以テ校長トナス君早速同志ヲ集メ演説シテ曰ク「予ハ到底郡吏ノ奴隷タルヲ甘ンズルノ忍耐力ナシ」ト即日辭表ヲ投シ閑居シテ洋書ノ研究ヲ爲セリ十二年再ヒ東京ニ來リ落魄爲ス所ナシ漸クニシテ近事評論社ノ食客トナリ僅ニ口ヲ糊スルヿヲ得タリ然レドモ社主林某ノ共ニ爲スニ足ラザルヲ察シ去ッテ佐賀ノ人副島某ニ依ル某ハ磊落ノ士ナリ口ヲ勤王ニ藉リテ大ニ爲ス所アラントシ窃カニ同志ヲ結合シテ新聞ヲ發行シ學校ヲ興サントス而シテ先ヅ之レヲ君ニ謀ル君大ニ贊成シ自ラ担任シテ廻瀾雜誌ナルモノヲ發行セントト計畫シタリシガ未ダ第一號發市ノ運ヒニ至ラズシテ止ム是レ其原稿過激ノ文字多カリシヲ以テ同志ノ一人金主某ガ

深ク恐懼シテ妨碍ヲ加ヘタルニ因ルナリ然レ𪜈一方ハ遂ニ成就シテ庚申學校ト稱シ大ニ子弟ヲ誘導シタリ君一日校堂ニ臨ミ佐賀人ノ勇氣ニ乏シク事業ノ共ニ爲スベカラザル旨ヲ演說ス壯士聞テ非常ニ激昂シ放言シテ曰ク「咄黄口ノ一小未敢テ我人士ヲ嘲ケル請フ彼レガ頭ヲ得テ我人士ノ慍リヲ償ハン」君危キヲ察シ風然トシテ逃ル翌年紀州ニ至リ和歌山ノ私學校ニ聘サレ教師タルヿ殆ンド三春秋此間ニ於テ南海雜誌ナルモノヲ發行シ盛ンニ激論ヲ唱フ十五年末和歌山德義學校ノ招聘ニ應シ在校年餘其他和歌山ノ爲メニ盡スヿ少ナカラズ此年本藉ヲ和歌山ニ移ス十七年東京ニ來リ間モナク神戸又新日報社ノ聘ヲ受ケ同地ニ赴キ勉事ニ從フ翌年轉シテ大坂日報社ニ入リ編輯ヲ主任セリ遇マ伊藤參議清國ニ派出シテ談判ノヿアリ君乃チ大坂日報及ビ神戸又新日報ノ托ヲ受ケ通信員トシテ清國ヘ渡航シ上海、天津、北

京等ヲ巡遊シ二ケ月ヲ經テ歸朝セリ十九年又聘ニ應シテ東京ナル朝野新聞社ニ入リ二十一年同社ヲ辭シテ更ニ政論社及ヒめざまし新聞社ニ入ル後チ村山龍平氏公論新報ヲ買取ルニ至リテ之ガ主筆トナル時ニ後藤伯頻リニ大同團結ヲ唱ヘ皷躁シテ東北ヲ漫遊シ君之ニ隨行シ歸リ來リテ大石正巳氏等ト議ノ合ハザルモノアリ遂ニ政論社ヲ退ク居士ハ君ガ曾テ公論新報紙上ニ於テ諄々乎大同團結ノ諸氏ヲ警ムルガ如ク國家ノ事ハ智識ニ訴フヘシ感情ニ訴フ可カラズトテ丁寧ニ論說シタル中ノ一節ヲ備忘錄ニ摘記シ置キタリ曰ク「政治家ガ國家ヲ經營スルニ當ツテ輿論ノ勢力ヲ藉ランド欲セバ政治上ノ利害得失ヲ明說シテ人民ノ判斷力ヲ支配ス可シ道德上ノ正邪曲直ヲ指示シテ其想像力ヲ刺衝ス可カラザルナリ」ト居士ハ此數文字ガ必ズ退社ノ一分子タルヿヲ信ズルナリ而レに君ハ大ニ大同團結ノ大主意ヲ贊成シ末

廣氏ヲ助ケテ公論ニ從事スルノ旁ハヲ伯ガ目的トスル所ノ主義ヲ擴張シ居レリ嗚呼縱横奔走席暖カナルニ暇アラズ隨分御多忙ナルカナ君ノ著譯ノ重モナルモノハ獨眼龍、商家ノ腐敗ナリ

要スルニ君ハ流寓又タ轉蓬所謂「俗さッぱり」ニ似タリ抑モ亦小節ニ拘ハラズ人ノ爲メニ容レラレズ豪傑ノ一大分子零落ナル性質ヲ有スル大丈夫ナル耶

○伴　直之助君

東京經濟雜誌

君文久二年八月二十五日東京本郷區弓町ニ生ル父ハ大島東一郎ト稱シ幕府ノ御勘定方タリ性朴訥、勤儉ヲ以テ稱セラル君ハ其次男ナリ七歳ニシテ甫メテ丸山小學校ニ入リ後チ麟祥院ニ移ル性讀書ヲ好ミ敢ヘテ校課ヲ以テ足レリトセズ自カラ發起シテ輪讀會ヲ開キ或ハ校課ノ外特ニ時間ヲ定メテ教師ニ質問ヲナスナド頻リニ黽勉卒勵シテ學業ニ從事セリ加之毎試驗必ラズ好結果ヲ得タリシカバ師傅ノ慈愛モ一層ノ深キヲ致シタリト云フ遂ニ明治五年春期ヲ以テ卒業讀書並ニ優等賞ヲ受ケ直チニ柳澤信太氏(敬宇翁ノ門人)ニ從ヒ英學ヲ修ム同氏亦非常ニ君ノ秀才ヲ歎賞シテ止マズ常ニ君ニ言ッテ曰ク子ハ到底門下ニ立タシムルノ人物ニアラズト八年君遂ニ同氏ノ推薦ニヨッテ中

村正直先生ノ塾ニ入ル然レ𪜈專ラ學業ニ從事スルヿ能ハス給仕(キユウジ)取次(トリツギ)ハ半(ナカ)バ其職務タリ在學五年又首尾能ク卒業證書ヲ受ク是レヨリ先キ十二年一月東京經濟雜誌ノ發行アリ而シテ君ハ素ト同誌ノ記者田口卯吉氏ノ所說ヲ贊成スル所ナリケレド在塾ノ頃ヨリ熱心銳意進シテ同誌ノ爲メニ盡力スルヿ少ナカラズ此ノ如ク學問ノ嗜好經濟ニ在リシヲ以テ卒業ノ後ハ又他ニ求ムルヿヲ欲セズ專心一意全力ヲ致シテ經濟雜誌ノ編輯ニ從事セリ十五年十月甲府峽中新報ノ聘ニ應ジ同地ニ赴テ主幹タルヿ殆ンド六閱月任滿チテ歸京シ經濟雜誌ニ從事スル從前ノ如シ十八年大坂立憲政黨新聞社(後チ改題シテ大坂日報ト云フ)長河津祐之氏ノ囑托ヲ受ケ大坂ニ下リテ同社ノ主筆トナリ新聞紙上ニ光彩ヲ放ツヿ全一周歲其間大ニ同社ノ財政ニ執掌シ奏功甚ハダ多シ十九年春君發起者トシテ京都ノ紳商濱岡光哲氏等ト謀リ京都商工

銀行ナルモノヽ設立ニ着手シ七月ニ至リ創立事務粗ボ整頓ニ就キタリシガ生憎(アヤニク)歸京ノ途ニ上ラザル可ラザル事故出來(シユツタイ)シタルヲ以テ事ヲ友人芝某ニ托シ東京ニ歸ル幾干クモナクシテ故小松彰、田口卯吉、木村半兵衛ノ諸氏ト力ヲ併セ兩毛鐵道ノ創立ニ從事シ爾來奔走經營最モ力ヲ盡シタルヲ以テ遂ニ翌年四月選任セラレテ兩毛鐵道會社支配人トナル又二十一年深川區ヨリ選出セラレテ東京府會議員ニ列シ本年四月深川區市徵兵參事員トナル是レヨリ先キ明治十四年改進黨起ルニ及ビ友人ノ勸メニ依テ同黨員タリシガ年ヲ越ヘテ直ニ之ヲ辭シ以後毫モ政黨ニ關係ヲ有セズ只十五年ヨリ嚶鳴社員トナリテ今尙ホ同社ノ諸氏トハ親密ナル交際ヲ爲セリト云フ君又曩キニ發起シテ經濟學協會ナルモノヲ設立シタリシガ當今ニ至リ愈ヨ其基礎ヲシテ鞏固タラシメ目下世界ノ一大問題タル銀價下落ノ件ニ付キ或ハ日米貿易

改良ノ件若クハ東京閣築港ノ件ニ付テハ常ニ同會ノ委員トナリテ盡スヿ一方ナラズ而シテ又經濟雜誌ニ從事シテ著々經濟上ノ進歩ヲ計ルヿ舊ノ如シ此ノ如ク斷然政黨ノ外ニ立チテ益々奔走盡力セシカバ頗ブル實業家ノ信用ヲ得テ近來ニ至リ名聲頓ニ著ハル

又「けあんす」著經濟要義及ヒ「まるはーる」著万國進歩之實況等ノ譯述アリ

憲法發布式を祝ひて

ゆびをりて松日にあらぬわれも人も
浮代の千歳をあとはぎ眞鶴

上州高津戸に紅葉を見て兩毛鐵道の開業を祝する歌

ひらけゆく世は深山路のもみぢ葉も
訪ひ來る人の去年にましけり

○青木匡君

毎日新聞
東京輿論新誌

君安政元辰年九月二十八日但馬國出石郡出石ニ生ル家ハ世々士族タリ父ヲ喜惣ト稱シ幼ニシテ母ヲ失フ齡甫メテ七歳藩儒某ノ塾舍ニ通學シテ專パラ漢籍ヲ修ム當時出石藩ノ制規トシテ九歳ニ至ラザル中ハ決シテ校堂ニ上ルコトヲ許サヾリケレバ君頻リニ不滿ヲ唱ヘ碌々トシテ敢テ勉勵セズ九歳ノ春早速弘道館ニ入學シ此時ヨリ翻然トシテ非常ニ勉强シタリト云フ十二歳ニ及ヒ傍ラ幽蘭舍ト名ヅクル義塾ニ入リ孜々トシテ一意學業ニ黽勉セシカバ學力優等ノ廉ヲ以テ屢バ賞與ヲ受ク忽チ藩主ノ聞スル所トナリ學費トシテ別ニ若干ノ祿ヲ賜ハル人皆之ヲ榮トス十六歳ノ時廢藩置縣ト同時ニ弘道館廢セラレ尋デ幽蘭舍モ亦門ヲ杜ヅ明治四年君夙トニ將來社會ニ立チテ爲スア

ラント欲セバ海外諸國ノ事情ニ通ズルノ必要ナルヲ感シ加藤正矩氏ヲ師トシテ英學ノ研究ヲ爲セリ此年三月櫻井勉氏(今內務省地理局長タリ)石鐵縣參事トナリテ赴任スルニ際シ深ク君ノ志ヲ賞シ且將來ニ望ミアリトノ故ヲ以テ君ヲ伴ナヒ石鐵縣(今愛媛縣ト云フ)ニ赴ムク居ル一月櫻井氏職ヲ解テ上京ノ途ニ就ク又伴ハレテ東京ニ來リ愛宕下勸學義塾ニ入ル後チ轉ジテ湯島共慣義塾ニ入リ專パラ英書ヲ學ブ同塾卒業ノ後チハ一時同校ノ教師トナリ旁ハラ或ル私塾ノ教授ヲ兼ヌ十年神田美土代町ナル共學舍ノ聘ヲ受ケ同校教員トナル此時ニ當リ同校ノ衰微甚ハダシク將サニ廢校セントスルノ有樣ナリシガ君經營盡力教授モ亦非常ニ鄭重ヲ盡シタリシカバ夫レヨリ再タビ振起シテ益々盛況ヲ呈シ爲ニ校舍ノ增築ヲ爲スニ至レリ十二年ノ末事故アリテ同校ヲ辭シ職トシテ內務省ノ飜譯ニ從事セリ之レヨリ先キ大ニ時

事ニ感スル所アリ有力ノ人士ト相會シテ言論ヲ戰ハサント欲シ嚶鳴社ニ加入シテ討論演說ヲ爲スコト多シ爾來今日ニ至ルマデ時々嚶鳴政談演說會トシテ開クモノ即ハチ是レナリ蓋シ君ノ辨舌ノ流暢ニシテ常ニ聽衆ノ喝采ヲ博スルハ蓋シ源ヲ此嚶鳴社ニ取リシモノナル可シ十二年七月朝野新聞社ニ入リ時ニ論說ヲ草ス翌年ノ始メ故アリテ同社ヲ辭シ東京橫濱每日新聞社(今ノ每日新聞社ナリ)ニ入ル同年五月長野日々新聞社(后チ改題シテ信濃日報ト云フ)ノ招聘ニ應シ信州ニ赴キ同紙ノ編輯ヲ主任シテ盛ンニ計畫スル所アリ並ヒニ各地ニ漫遊シテ頻リニ政談演說ヲ試ム十四年春信濃日報社ヲ辭シテ東京ニ歸リ再タヒ京濱每日新聞ニ入リ傍ハラ東京輿論新誌ノ編輯ヲ助ク君初メテ朝野新聞社ニ入リシヨリ以來今日ニ至ル迄拮据新聞事業ニ從事スルモノ殆ンド將ニ四千日ヲ以テ數ヘントス豈盛ナラズヤ十五年改進黨

ノ組織セラルヽニ當ツテヤ舊ツテ同黨ニ加入シ翌年ヲ以テ黨勢擴張ノ爲メ肥塚氏等ト共ニ岐阜地方ニ遊ンデ演壇ニ上ルヿ數ヲ可カラズ

十八年十月本鄉區ノ府會議員補欠ノ選擧ニ當リ后チ過半數改選ノヿアリシモ依然再任ノ榮ヲ擔ヘリ二十一年四月改進黨ノ總會ニ際シ擇バレテ同黨事務委員トナル其他大日本監獄協會議員、明治倶樂部幹事、本鄉區衛生會幹事等ナリ

又君ハ余程翻譯好キト見ヘタリ明治十一年「ひるどれつす」著政理論ヲ十五年「ろつてすれー」著政法原論ヲ飜譯シ翌年沼間、島田等ノ諸氏ト共同シテ「だいあー」著近代歐羅巴史ナルモノヲ反譯シテ大ニ世人ノ賞讃ヲ得タリ近世泰西通鑑ト題スルモノ即チ是レナリ十八年島田氏ト共ニ前米大統領「ぐらんど」將軍ノ傳ヲ反譯シテ米國偉觀ト稱シ是亦頗ル

好評ヲ博セリ

此繁雜ナル經歷ヨリ見ル時ハ別ニ上下論評ヲ容ルヽ程ノヿナシト雖モ要スルニ「ヽヽノ事務家」ナルヘシ而シテ「ヽヽ」ハ居士未ダ之ガ明示ヲ爲サヾルナリ宜ベナリ改進黨員中ニ錚々ノ名聲ヲ揮フヤ

⊙辰巳小次郎君

日本人（政教社）
大同新報

君安政六年江戸市ケ谷尾州侯ノ邸内ニ生ル甫メテ七歳家庭ニ於テ讀書並習字ヲ學ブ戊辰ノ變ニ際シ携ヘラレテ尾州ニ赴キ明治四年藩立英語學校ニ於テ横瀬文彦、赤沼彦五郎ノ兩氏ニ就キ專パラ英語ヲ修ム六年歸京シテ東京英語學校ニ入リ八年又轉シテ開成學校（後チ東京大學ト改稱）ニ入ル十四年東京大學ヲ卒業シテ文學士ノ榮位ヲ受ク此年東京大學豫備門教諭ニ任ゼラレ後チ豫備門ノ第一高等中學校ト改稱シタリシ時モ亦教諭ヲ命ゼラレタリ二十年時勢ニ見ル所アリテ解職ヲ乞フ此以來ニ於テ私立學校ヨリ禮聘ヲ受クルヿ甚ダ多シ其承諾シタル重モナルモノハ共立學校、高等普通學校、日蓮宗大擅林、哲學館、專修學校等ナリ二十一年三宅雄次郎、志賀重昂其他同志ノ諸氏ト相謀リ四

月三日ヲ以テ雜誌日本人ヲ發行セリ

此時ニ當ツテヤ所謂洋癖家ナル者……否ナ寧ロ洋癖家ヲ眞似ル者實ニ夥ダシク衣食住ヨリ以テ政治、宗教、文學ニ至ルマデ善トナク惡トナク一ニ彼レニ摸倣セントシ炎天金ヲ鑠スノ時ニ當リ究屈ナル洋服ヲ穿チテ玉汗ヲ拭フ者アリ寐間ヲ一坪未滿ノ寐臺ト變シテ三更玄海灘ヲ夢ム者アリ洋食ノ饗應ヲ受ケテ醫師ノ診察ヲ乞フ者アリ或ハ曾テ我佛法ノ門ヲ窺ヒタルヿナクシテ暗雲ニ之ヲ排斥シ洗禮ヲ受ケテ吾ハ耶蘇信者ナリト誇揚スル者アリ居士曾テ新聞紙ヲ讀デ失笑シタルヿアリ曰ク「一客アリ箱根ノ浴舍ニ宿ス我浴衣ヲ纏ヒ我酒ヲ飲ミ我菓子ヲ食フ而メ然カモ米國人ニシテ佛法ヲ崇信スル者ナリト又一人アリ彼洋服ヲ穿チ彼麥酒ヲ飲ミ彼「びすけつと」ヲ食フ而メ然カモ日本人ニシテ無暗ニ「あーめん」ヲ有難ガル者ナリト偶マ浴場ニ邂フ洋服先生先

ヅ口ヲ開テ曰ク西洋ノ衣服實ニ体ニ便ナリ答ヘテ曰ク然リ曰ク西洋ノ酒食實ニ口腹ニ宜シ曰ク然リ曰ク「耶蘇教ノ説ク所實ニ善シ曰ク誠ト ニ然リ余ハ卿ニ向ッテ卿ガ佛教ヲ排斥スルノ理由ヲ聞カンコトヲ望ム ト是ニ至ッテ洋服先生氣味惡クナリシカ復タ一言ヲ發セズ狐鼠々々室ニ歸リ翌曉月ヲ踏ンデ出立シタリト彼長ヲ採リ以テ我短ヲ補フ固ヨリ其所ナリト雖モ一ニ彼レニ心醉スル者ニ至ッテハ吾人ノ甚ダ解セザル所ナリトス豈ニ啻洋服先生ノミナランヤ滔々タル天下皆是レナリ此迷醉ノ中ニ立チ大聲疾呼國粹ノ主義ヲ發揚シテ大ニ大和魂ヲ振起セシメタル者ハ日本人ナリ嗚呼快ナラズヤ吾人ハ日本人記者ニ對シテ其功勞ヲ拜謝セズンバアラズ

本年一月君又大内青巒氏等ト謀リ尊皇奉佛大同團ナルモノヲ發起シテ之レガ機關雜誌大同新報ナルモノヲ發行セリ尊皇奉佛ノ四字ニ付

テハ少シク議論アリタルガ如シト雖ドモ未ダ以テ諸氏ガ大同團ヲ抱ク所ノ希望ノ百分一ヲ傷ツクルニ至ラザルナリ

君ノ著譯ハ最モ多シ其重モナルモノハ哲學要義、哲學茶話、文明要論、女權沿革史、雅語綴字倒、萬國現行憲法比較、帝國憲法正解等ナリ居士ハ哲學茶話ヲ繙テ君ヲ敬慕スルノ念ヲ生ジ綴字倒ヲ味フテ其博識ニ歎服セリ今茲ニ喋々賞揚スルヿヲ止メテ哲學茶話卷尾ノ數語ヲ掲グベシ

該書ハ先ヅ萬物ノ太原ヨリ説起シ論處、本性、相關等展々歩ヲ進メテ益々佳境ニ入リ終ニ不思議ヲ説出シテ佛國革命ヲ引証シ續テ「非常ノ事變ハ非常ノ知能ニヨラザレバ成ラズ、非常ハ不思議ニ近ク非常ノ知能ハ不思議ノ知能ニ近シ、去レバ革命者ハ知能ヲ女神ニ象リテ其偶象ヲ拜崇スルニ至レリ、此處ニ知ラルヽハ第一ニ無神論ハ直ニ國家ノ破滅ヲ來スヿ、第二ニ無神論ハ遂ニ淫藝ノ祭祠ヲ來スヿ、第三ニ人ハ天性永

シ不思議ノ念ヲ斷ツ能ハザルナリ

337073

○關直彦君

東京日々新聞（日報社）
銀行雜誌

橘村居士關直彦君ハ安政四年和歌山縣下和歌山ニ生ル關平兵衛ノ三男ナリ五歳ニシテ甫メテ學舍ニ上リ屢バ褒賞ヲ得タリ後チ縣學ニ入リ漢籍並數學ヲ修ム性温厚篤實事ヲ執ル秩序アリ從ツテ品行端正ナリシカバ恒チニ師傅ノ敬愛スル所トナル明治七年大ニ感ズル所アリ四月鄕關ヲ辭シ大坂英語學校ニ入學シテ專パラ英書ノ研究ヲ事トス翌年ノ初メ上京シテ東京英語學校ニ入ル九年又タ轉シテ東京大學豫備門ニ入リ切瑳螢雪常ニ上位ヲ占メタリ校課ノ外更ニ日課ヲ製シ敢テ或ハ怠ルヿナシ後チ東京大學本科ニ進ミ遂ニ十六年ヲ以テ東京大學法學部ヲ卒業シ法學士ノ榮位ヲ受ク是ヨリ先キ東京日々新聞記者海内杲氏人ヲ以テ修學ノ傍ハラ日報社員トナリテ編輯事務ヲ助ケン

フヲ勸ム然レドモ君ハ當時司法官タラント欲スルノ志ナリシヲ以テ之レニ應ゼズ而シテ海内氏ハ始メヨリ君ノ俊才ナルヲ知リ居タレバ到底思ヒ止マル可キニアラズ勸誘再三頗ブル懇切丁重ヲ盡セリ君モ並厚情默止シ難キノ場合トナリタルヲ以テ遂ニ之レヲ承諾シ當日直チニ日報社ニ抵リテ大ニ編輯事務ノ改良ヲ促ガシタリ當時ニ當リ海内氏偶マ病アリ引キ變リテ歸國ノ途ニ上リ幾干クモナクシテ長逝ス君茲ニ於テ勢ヒ益々社ヲ去ルコト能ハズ此ニ始メテ新聞記者タラント欲スルノ念ヲ發シ愈ヨ奮ツテ同社ノ編輯ニ從事セシカバ爲メニ日々新聞モ一層光彩ヲ添ヘテ上流社會ノ愛讀多キヲ致シタリ是レヨリ天下ノ耳目ヲ以テ自カラ任ズル所ノ新聞記者ナルモノハ誠トニ愉快ナル職業ナリトノ感情ヲ生シ大學卒業ノ後ハ專ハラ日々新聞ノ編輯ヲ主任セリ當時我國ニ於テ法學者ノ目的トスル所ハ司法官若クハ代

言人ニ限リ之ヲ措テ又他ニ望ム可カラザルモノトナシ自カラ狹隘ナル境界ヲ形ナヅクリタルガ如キノ有樣ナリシ尤モ近來ニ至リテ稍ヤ區域ノ該博ヲ感ジタリト雖ドモ明治十四五年ノ交ニ際シ法學士ノ肩書ヲ有スル者ニシテ新聞記者トナリシハ蓋シ君ヲ以テ嚆矢トス……噫呼達觀ナル哉……君亦從來我邦ニ於テ學術研究ノ良法ナキヲ憾ミ法學士三崎龜之助、故法學士渡邊安積ノ兩氏ト謀リ此年學術攻究會ナルモノヲ設立シ君ハ担當シテ懇篤丁寧ニ「をーすちん」氏法理學ヲ講述セリ君ガ著「をーすちん」氏法理學講義第二卷ハ此時ニナリシモノナリ其學者ヲ益シタルコト甚ハダ尠少ニアラザルハ既ニ四度ビ版ヲ改メタルニテ知ラル可シ又其間ニ於テ英國訴訟法及ビ政事小說春鶯囀ノ著譯アリ居士ハ宗旨違ナルヲ以テ未ダ曾テ律書ヲ手ニセズ其小說春鶯囀ヲ讀ンデ所謂出來星譯述ノ匹儔ニアラザルヲ知ルナリ之レヲ讀

ム一回ニメ翻譯ナル二字ハ何レノ句章ニ存スルヤヲ疑ハシメ再タビ之ヲ手ニシテ更ニ倦クヿヲ知ラズ之レヲ繙ク三度ニシテ益々名狀スベカラザル妙味ヲ感ジテ遂ニ卷ヲ蔽フコト能ハザラシム十八年英吉利法律學校ノ設立ニ當リテ之レガ講師タリ又東京專門學校ノ講師ヲ兼ヌ此年東京麹町區ヨリ選バレテ東京府會議員ニ列シ翌十九年再選セラル幾干クモナクシテ時ノ外務大臣井上伯內務大臣山縣伯北海道巡視ノヿアリ君之レニ隨行シテ北海全道ヲ巡察シ歸リ來リテ北海道見聞錄ナルモノヲ著ハシ大ニ北海道施政ノ方畧及ヒ改良ヲ論ジタリ二十年三月時事ニ感アリ東都ヲ發シテ遠ク歐米ニ遊ヒ英、佛、伊、墺、獨、米ノ諸國ヲ巡回シテ仔細ニ政治、法律、文學、工業、新聞等ノヿヲ視察シ得ル所多シ年ヲ閱ミシテ日報社長福池源一郎氏其職ヲ辭スルニ當リ頻リニ早速歸朝ス可シトノ電報ヲ領シ據ロナク同年六月ヲ以テ一先ヅ歸

朝シタリ而ルニ切ニ其後任ヲ囑托セラレシカバ直チニ日報社長トナリ爾來東京日々新聞舊來ノ方針及ヒ同社ノ事務一切ヲ一新シテ益々其基礎ヲ鞏固タラシメタリ試ミニ數年前ノ日々新聞ヲ採リ來ツテ之ヲ今日ノ同新紙ニ比セヨ議論活潑ヲ含ミ雜錄亦タ趣キヲ異ニス御骨折ノ程コソ恐ロシケレ

吾人ハ君ガ日報社長トナリシ當時ハ失敬ナガラ日報社ノ爲メニ甚ハダ之ヲ危ブミタリ何トナレバ前社長福地源一郎氏ハ主義ノ如何ハ措テ問ハズ文才ヲ以テ博識ヲ以テ交際ヲ以テ經歷ヲ以テ新聞記者中復タ比類ナキ人物ナル可シ而シテ君一躍シテ直チニ其跡ヲ襲フ吾人ハ素トヨリ君ノ俊才ナルヲ知ル然レドモ交壇ノ老將櫻痴居士ニ對シテ少シク讓ル所ナキカヲ氣支ヒタレバナリ而カルニ近來ニ至リテ日々新聞發兌高ノ一層增加シタルヲ聞ク吾人ハ口ヲ噤シテ呆然タラズン

バアラズ

歸朝後ニ於テハ立憲王道論、立憲宰相論、立憲政治ノ人民並本年三月中大日本帝國憲法解釋ノ著アリ君又百般工業取引ニ關スル適切指針トスベキ雜誌ナキヲ憾ミ主筆ノ名義ヲ以テ銀行雜誌ナルモノヲ發行シタリ居士ハ一見セズシテ而シテ其好雜誌ナルヿヲ證スルナリ

嗚呼愼村居士ノ如キ多能有爲ノ士マタ幾人カアル

○須藤光暉君

改進新聞（三益社）

ことしは時候の不順なる爲めか靜穩を以て常とする我が文學社會にも至つて不穩當な風雲を生じて沖斷のならぬわる洒落の流行するとはなりぬ向には人の嗜好を顯はして力量の程を試みんとてか民友社の德富君痛み入つたる慇懃の書を寄せて書目十種を徵されたり實はこゝ駄法螺の吹き處と考へて讀めもせぬ珍書を集め世間の人の膽玉を拔き京傳が手提灯を明るくした讀書丸でも煉らんかとの野心なきにしもあらざりしが夫れには少し役者が惡るし切めてモ少し名の賈れた先生なら醫家ぐらいは威かす種にもなるべきが馬の後足が大百四纒で幕外の六法は餘りヅッとせざるを以て恥かしながら煙脂をしやぶらされた蛙の如く臓腑のありたけを

さらげ出して大いに將來の價値を減じたり夫れすら穩やかあらぬ酒落よと恨めしく思ふものを今また大屋の某は記者列傳を編纂するとて自傳を書けと注文されたり罪ある事をする人よと思へども仙人仲間の蹬庭の兄貴が下界にあんの謀反ありてか眞ッ魁がけた自傳の口切り筆に米喰ふ虫一疋數に漏れんも口惜ければ淺黄の頭巾をこゝに脱ぎて地金を示すことゝしたるがさてさうあれば我が傳記まで人に厄介をかくるも氣の毒吾が事を我が記すほど間違ひのあい事もあければいで懺悔して罪を滅さんと思ひ定めぬ

人は二十歳に至れば必らず傳ありとは聞くところあれど予は寧ろ二十歳後に傳らしきものあるのみにて其以前は殆んど夢中に經過せしあり殊に幼少より多病にして腦をいたく傷ねたれば記憶の實物あく性來の懶け者とて日記といふものもなくまたとり留めたる

履歴もあければ咄嗟の間に思ひ回らしたる事どもを臚列するのみ眞の自傳は生涯のうちに大成する心得あれば茶人あらば千金を抛つて之を繕くべし先は此のところ自傳の序開き神妙に御覽下されませう

南翠先生之傳

須藤南翠自記

先生諱光暉名猛字子素號南翠須藤氏安政五年十一月三日生於海南則四國猿也考但馬妣木原氏先生幼而尫弱多羸三日不甦父母爲以死焉備棺郭而不死數回此以六歳未就學七歳而初習字八歳而初讀書氣悋神厭号泣還家と申せば道理あり氣に閊ゆれども實は學問嫌ひにて手習草紙には水を流して人目を瞞かし書は經典餘師を懷にして試驗を濟すあり九歳にして射を習ひ十年にして劒馬を修めたれども稽古と名の附くものは虫が好まず馬は家に飼ひしを以て乘ることを好み江戸にあ

る頃は愛宕下の借馬屋の上華主とおり居たるゞ明治三年の夏父兄と丶もに馬に鞭つて麻布龍土の邸より淺草に赴く途次土岐邸前にて落馬し榎坂を轢落して絶息したりしより怖ろしくなりて漸く之も嫌ひとなりたり然るに予が再從兄入江邑次郎(今の穂積陳重氏)の拔擢せられて東京に來り藩費を以て大學南校に入るに及び奮然として學に志せり夫れもホンの當坐の事あり忽ちにして地金を現はし後ち宇和島に歸りて學寮に遊べども曾て書を讀まず寧ろ讀書家を粧ふて人を欺きたるあり其間の科目は時勢の變遷に應じて轉換極りなく或は漢書を廢して皇典之れに代り或は皇典衰へて飜譯書盛へ飜譯書と共に文英書起り再び國史を挽起するが如く學に就く者をして奔走に疲れしむ故に予は詩を學んで惓み歌を修めて厭き文を作りて惱み今に至るまで佳什名篇の記すべきものなし要するに予が學問の履歴は嚙りく

さしにして專ずる所あく少しく心を用ひて讀みたるものは軍書小說隨筆に過ぎず

明治十年予は貧を荷ふて山谷にあり心窃かに隣巷ある國直樹氏を說いて龜岡町に一大學校を興し以て新平民を薫陶せんと企圖せり然れども事の成り難きを見て止む翌十一年一月有喜世新聞濱町に起る予即はち三益社に入りて甫めて新聞事業に就く然れども之は創業の時あり若し詳らかに予が此際の傳を記せば記者たるの傳もあるべく探訪者たるの傳もあるべく會計員たる傳もあるべく則はち自ら探り自ら記し自ら植字し自ら校し自ら刷行し自ら賣りたるあり事漸く整頓して單に記者たるの地位を得たるのち罪を享くること數次后ちは名を匿してまた公廷の煩を避けたり十六年一月有喜世新聞發行を禁止せられ其の三月更に開花新聞を發行す翌

年八月一日題を改めて改進新聞といふ今日に至るまで予は依然として三益社の厄介者たり本年一月交友諸氏と謀りて「新小說」を發刊す此外に傳あし是れにて御免を蒙むるべし

寫眞は生憎持合せなければ掲げて世の婦人に視せざりしを憾む一言以て之を掩はゞ白皙秀麗酷だ成駒屋福助に肖たり若し予が寫眞を望む人あらば去つて福助の寫眞を購へ余豈人を欺くものあらんや

現今名家記者列傳 終

大屋專五郎編

現今名家記者列傳

明治二十二年七月十日發行

版權所有

明治廿二年六月廿日印刷

明治廿二年七月一日出版

出版發行者

春陽堂和田篤太郎

東京日本橋區通四丁目五番地

印刷者岡本桑次郎

東京日本橋區通四丁目五番地

No.1

東京書林春陽堂出版書目概表

御注文ニ依リ相當ノ割引ス

- ●萬國史要　スヰントン氏著　文部省撿定濟　日本松島剛譯　全三冊　定價一圓五十錢
- ●日清文明論　セームスハリソン著　日本松島剛譯　全四冊合卷　定價一圓卅錢
- ●數學五千題　大島孝造著　文部省撿定濟　松島剛著　全四冊解式共　定價金壹圓
- ●ナポレオンスペルリング　文部省撿定濟　全一冊　定價十五錢
- ●上眞草千字文　巻菱型書　文部省編輯　定價三十錢
- ●日本教育史畧　全一冊　定價五十錢
- ●珠算五千題　大島孝造著　全三冊　定價四十五錢
- ●小學珠算題叢　大島孝造著　全二冊　定價廿五錢
- ●クワッケンボス文典獨案內　垣山緣譯　全一冊　定價八十錢
- ●明治算法新書　全一冊　定價十二錢
- ●明治和歌教草　和田民之助著　全一冊　定價廿五錢
- ●東京活用字典　全一冊　定價廿五錢
- ●後藤訓點四書　活字假名付和本　全四冊　定價廿錢
- ●後藤訓點五經　活字假名附和本　全六冊　定價一圓廿錢
- ●哲學階梯　獨逸ウエンツケ著　今井垣郎譯　全一冊　定價五十錢
- ●冠註和漢類語對照記事論說軌範　大島孝造著　全二冊　定價三十錢
- ●四則問題貳百五十題集　岡三慶著　定價十錢
- ●震世文躰明辨　全四冊　定價六十錢
- ●纂評新躰詩選　全一冊　定價廿錢
- ●新躰詩愛國美談　定價十五錢

No.2

東京書林春陽堂出版書目概表

御注文ニ依リ相當ノ割引ス

- 日本憲法作解 市制町村制詳解 全一冊卅錢
- 市町村制俗解 著者匿名 全一冊八錢
- 市制町村制纂釋 全一冊 定價五十錢
- 將來之日本社會 全一冊 定價五十錢
- 大日本憲法問答 大久保櫻州著 定價十錢
- 交通寶鑑 全一冊 定價十五錢
- 幸福の種 全一冊 定價五錢
- 現今民事刑事訴訟手續獨案內 原田灣譯 全一冊 定價廿五錢
- 佛國ソー民約論覆義 全一冊 定價六十錢
- 改正徵兵令詳解 定價六錢
- 改正公證人規則登記法註解 定價十錢

- 開面彦陽渡邊亨輯 帝國憲法釋義 全一冊 定價六十錢
- 法學士竹村欽次郎著 全正義 定價卅五錢
- 全俗解 定價八錢
- 全寸珍本 定價七錢
- 全傍訓 定價五錢
- 高田早苗註釋 全註釋 定價廿五錢
- 中村千太郎著 伊藤內閣史 定價廿五錢
- 實地製法獨案內 定價廿二錢
- 詩作應用 幼學便覽 全一冊 定價廿錢
- 日本政記字類大全 定價廿五錢

No.3

東京書林春陽堂出版書目概表

御注文ニ依リ相當ノ割引ス

- 甲越烈戰軍記 法學士山口莊吉著 全二冊 定價五十錢
- 蓋世之偉業 辻治之助著 全一冊 定價八十錢
- 日本帝國一大現東志士淑女之想海 石川鴻齋著 全一冊 定價九十五錢
- 再生奇緣花神譚 全一冊 定價三十錢
- 畫入伊曾保物語 全一冊 定價六錢
- 繪本劍客者列傳 全一冊 定價廿錢
- 夢惣兵衛胡蝶物語 四村芝山著 並本全一冊 定價八錢
- 繪入近古慷慨家列傳 全一冊 定價二十錢
- 內地雜居後經濟未來記 松永道一著 全一冊 定價廿錢
- 內地雜居之準備 育田節著 全一冊 定價十五錢
- 汗血千里駒 全一冊 定價二十錢
- 校訂鹿兒島太平記 全一冊 定價十錢

- 牛山鴻堂譯 新譯魯敏孫漂流記 全一冊 定價三十錢
- シュールスベルチ著 井上勤譯 日間五卅 空中旅行 定價卅錢
- 辻治之助著 破窓之風琴 定價廿錢
- ビーコンスフヒールド著 牛山鴻堂譯 雙春話 定價廿錢
- 社會小說 日本未來 上下二冊定價上下合九十五錢
- 大久保櫻洲著 東京未來繁昌記 全一冊 定價卅八錢
- 前田太郎 喜多川金吾譯 戰場之花 全一冊 定價六十錢
- 高田早苗森三樹著 運籌偉蹟 全一冊 定價五十錢
- アーテ著 依田百川譯 井上勤譯 世界奇談 狐之裁判 定價卅錢
- 小室重弘著 眞妝婦 全一冊 定價四十錢

No.2

東京書林春陽堂出版書目概表

御注文ニ依リ相當ノ割引ス

- 日本憲法作解 市制町村制詳解 全一冊 定價壱錢
- 市町村制俗解 全一冊八錢
- 著者匿名 市制町村制纂釋 全一冊 定價五十錢
- 將來之日本社會 大久保櫻州著 全一冊 定價五十錢
- 大日本憲法問答 定價十錢
- 交通寶鑑 全一冊 定價十五錢
- 幸福の種 全一冊 定價五錢
- 現今民事刑事訴訟手續獨案內 勘解 全一冊 定價廿五錢
- 原田潛譯 佛國ルソー民約論覆義 全一冊 定價六十錢
- 改正 徵兵令詳解 定價六錢
- 改正 公證人規則登記法註解 定價十錢
- 開直彦閣渡邊亭譯 帝國憲法釋義 全一冊 定價六十錢
- 法學士竹村欽次郎著 全正義 定價廿五錢
- 全俗解 定價八錢
- 全寸珍本 定價七錢
- 全傍訓 定價五錢
- 高田早苗註譯 全註釋 定價廿五錢
- 中村千太郎著 伊藤內閣史 定價廿五錢
- 實地製法獨案內 定價廿二錢
- 詩作應用 幼學便覽 全一冊 定價廿錢
- 日本政記字類大全 定價廿五錢

No.3

東京書林春陽堂出版書目概表

御注文ニ依リ相當ノ割引ス

- 甲越烈戰軍記 全一冊 定價五十錢
- 法學士山口莊吉著 蓋世之偉業 全一冊 定價八十錢
- 日本帝國志士淑女之想海 辻治之助著 全一冊 定價九十五錢
- 現象大川鴻齋著 再生奇緣花神譚 全一冊 定價三十錢
- 畫入伊曾保物語 全一冊 定價六錢
- 繪本劍客者列傳 全一冊 定價廿錢
- 夢惣兵衛胡蝶物語 蛇本全一冊 定價八錢
- 西村芝山著 繪入近古慷慨家列傳 全一冊 定價二十錢
- 松永道一著 內地雜居後經濟未來記 全一冊 定價廿錢
- 育田節著 內地雜居之準備 全一冊 定價十五錢
- 汗血千里駒 全一冊 定價二十錢
- 校訂鹿兒島太平記 全一冊 定價十錢
- 牛山鶴堂譯 新譯魯敏孫漂流記 全一冊 定價三十錢
- ジュールスベルチ著 井上勤譯 日廿五間空中旅行 定價廿錢
- 辻治之助著 破窓之風琴 定價廿錢
- ピーコンスフヒールド著 牛山鶴堂譯 雙孀春話 定價廿錢
- 社會小說 日本未來 上下二冊定價上下合九十五錢
- 大久保櫻洲著 東京未來繁昌記 全一冊 定價廿八錢
- 前田太郎 喜多川金吾譯 戰場之花 全一冊 定價六十錢
- 高田早苗森三樹著 邏羅偉蹟 全一冊 定價五十錢
- ゲーテ著 依田百川跋 井上勤譯 金獸世界狐之裁判 定價廿錢
- 小室重弘著 眞妝婦 全一冊 定價四十錢

No.4

東京書林春陽堂出版書目概表

御注文ニ依リ相當ノ割引ス

- 繪入唐詩選　全一冊　定價十二錢
- 初紅葉（同好會員蓮山人著）　全一冊　定價廿錢
- 鬼車（隅廻坊著）　全一冊　定價十錢
- 蓮葉娘（櫻庭雄村著）　定價十錢
- 轉宅叢談（香雪散人著）　定價十錢
- 大川物語（綱の屋主人著）　定價拾五錢
- 二夫婦（三味道人著）　定價十錢
- 金香露（南翠外史著）　全一冊　定價二十錢
- 月雲兩面鏡（採菊散人著）　全一冊　定價二十錢
- 心中（南翠外史著）　全二冊　定價十錢
- 英國スコット著　牛山其助譯　小政治梅雷餘薫　定價六十錢
- 佛國アーロビタ著　日本陸山廣忠譯　止舎歩進世界未來記　定價八十錢
- ジュールスヴェル子著　日本福田直彦譯　萬里絶域北極旅行　定價八十錢
- 岡野碩著　裁判小說秋暮嘆　全一冊　定價五十錢
- 坎坷山人著　行路難　近刻
- 裁縫獨案內　定價廿五錢
- 南翠外史著　慨世悲歌照日葵　全一冊　定價六十錢
- 塚原翠洲著　曼府の叛亂　定價廿五錢
- 末廣鐵腸著　小政治說雨前之櫻　全一冊　定價卅五錢
- 南翠外史著　新粧之佳人　定價四十錢

No.5

東京書林春陽堂出版書目概表

御注文ニ依リ相當ノ割引ス

- 西南水滸傳（爲永春水著）　全一冊　定價二十錢
- 以呂波文庫　全一冊　定價三十錢
- 伊賀越實記　定價六錢
- 石川五右衛門實記　定價六錢
- 朝顏日記　定價五錢
- 花茨露面影　全四冊　定價十錢
- 新田功臣錄　定價拾二錢
- 園之菊匂姫垣（三宅虎太譯）　定價五錢
- 男女自衛論　定價卅五錢
- 佐倉宗吾實記　定價五錢
- 男女交合得失問答　全一冊　定價五錢
- 粹人秘訣糸竹之栞　全一冊　定價八錢
- 八重手すき戀路のかつら　定價五錢
- 八重櫻里の夕暮（草迺舍蝴蝶編輯）　定價五錢
- あづま都々逸五百題　全一冊　定價十五錢
- 合鏡心の善惡　全一冊　定價五錢
- 契情意味張月　全一冊　定價五錢
- 東京自慢（一名糸みち）　定價五錢
- 三ツ巴戀白雪（岡三慶著）　全一冊　定價三十五錢
- 明治用文證　定價五錢
- 椿の花把（加藤柴芳著）　定價二十錢
- 小說萃錦　合卷　一ノ卷卅五錢　二卷卅五錢　三卷卅五錢　四卷卅五錢
- 男女交合新論（橋爪貫一先生譯）　全一冊　定價廿八錢

No.4

東京書林春陽堂出版書目概表

御注文ニ依リ相當ノ割引ス

- 繪入唐詩選　全一冊　定價十二錢
- 初紅葉（同好會員淺山人著）　全一冊　定價廿錢
- 鬼車（隔恩坊著）　全一冊　定價十錢
- 蓮葉娘（蓼庭館村著）　定價十錢
- 轉宅叢談（香雪散人著）　定價十錢
- 大川物語（霧の屋主人著）　定價拾五錢
- 二夫婦（三味道人著）　定價十錢
- 金香露（南部外史著）　全一冊　定價二十錢
- 月雲兩面鏡（採菊散人著）　全一冊　定價二十錢
- 心中（南部外史著）　全一冊　定價十錢
- 梅雷餘薫（英國スコット著　牛山貫助譯　小政治說）　定價六十錢
- 世界未來記（佛國アーロビタ著　日本陸山廣忠譯　止會歩進）　定價八十錢
- 北極旅行（ジュールスヴエル子著　日本細田直彦譯　萬里絶域）　定價八十錢
- 裁判小說秋暮嘆（岡野頑著）　全一冊　定價五十錢
- 行路難（坎坷山人著）　近刻　定價廿五錢
- 裁縫獨案內（南部外史著）　定價廿五錢
- 日葵照（歐世悲歌原著　東洲著）　全一冊　定價六十錢
- 曼府の叛亂（米廣鐵腸著）　定價廿五錢
- 雨前之櫻（小政治說）　全一冊　定價卅五錢
- 新粧之佳人（南部外史著）　定價四十錢

No.5

東京書林春陽堂出版書目概表

御注文ニ依リ相當ノ割引ス

- 西南水滸傳（馬永春水著）　全一冊　定價二十錢
- 以呂波文庫　全一冊　定價三十錢
- 伊賀越實記　定價六錢
- 石川五右衛門實記　定價六錢
- 朝顏日記　定價五錢
- 花菱露面影　全四冊　定價十錢
- 新田功臣錄　定價拾二錢
- 園之菊匂姫垣　定價五錢
- 男女自衛論（三宅虎太郎譯）　定價卅五錢
- 佐倉宗吾實記　定價五錢
- 男女交合得失問答　全一冊　定價五錢
- 糸竹之栞（秘人秘訣）　全一冊　定價八錢
- 八重手戀路のかつら（すき）　定價五錢
- 八重櫻里の夕暮　定價五錢
- あづま都々逸五百題（草迺舍鄙蘭編）　全一冊　定價十五錢
- 合鏡心の善惡　全一冊　定價五錢
- 契情意味張月　全一冊　定價五錢
- 東京自慢（名所のあらまし）　定價五錢
- 三ツ巴戀白雪（岡三郎著）　定價五錢
- 明治用文證　全一冊　定價三十五錢
- 椿の花把（加藤柴芳著）　定價二十錢
- 小說萃錦　合卷　二ノ卷　卅五錢　三卷　卅五錢　四卷　卅五錢
- 男女交合新論（桃水貫一先生譯）　全一冊　定價廿八錢

7A40

新小說

同好會員人名表

忍　香
月　美
石　錦
巖　南
橋　學
谷　塾
田　鍾
村　美
友　妙
季　新
百　山
要　雪
吉　月
雄　二
川　海
介　洲
靖　人
郎　城
郎　齋
郎　前
天　山
鐵　中
碌　塚
三　谷
採　依
南　巖
思　石
香　小
村　宮
堂　比
菊　奈
味　女
軒　桂
翠　三
曙　知
朝　介
宮　郎
條　泉
森　史
須　減
崎　平
野　藏
田　傳
藤　文
光　璋
唯　雄
（順はろいの名）

毎月二回發行　一卷定價十錢
五卷前金四十七錢　十卷前金
九十錢　外に一卷に付二錢づ
つの郵送料を要す

新小說は文學の眞相を以て立つものなり、會員は當時文學社會の俊秀なり、其作品は餘りに遊戲なりとなし、況んや本誌の著作を以てなり、其作者各自幽微深遠の相像を逞ひ、來る人物の文章を描くあり、理想を主とするあり、大に江湖の愛讀を博するあり、其得意とする所に於てをや、其初めて第一卷を刊するや、本誌の後卷を重ぬるに從ひ、益增加する印刷高を見る、卷を一再版せざるなく、三版を促されるもの多しとなす、是れ偏に會員の賛成を得て、彩筆を加へしかは愛顧諸君、特に知る所にして、須藤南翠の三君、世評高く、世評の中藏

新小說は文學の眞相を以て立つものなり、會員は當時文學社會の俊秀なり、其作品は餘りに遊戲なりとなし、況んや本誌の著作を以てなり、其作者各自幽微深遠の相像を逞ひ、來る人物の文章を描くあり、理想を主とするあり、大に江湖の愛讀を博するあり、其得意とする所に於てをや、其初めて第一卷を刊するや、本誌の後卷を重ぬるに從ひ、益增加する印刷高を見る、卷を一再版せざるなく、三版を促されるもの多しとなす、是れ偏に會員の賛成を得て、彩筆を加へしかは愛顧諸君、特に知る所にして、須藤南翠の三君、世評高く、世評の中藏

自ら定まる所あり唯本會は頓に發行部數の意外なる增加を驚くのみ、今や第十卷を發行せんとす、編中藏する所の小說、一として其佳境にあらざるはなし、江湖の諸君、幸に吸收の榮を賜はらんことを

東京日本橋通四丁目五番地

春陽堂主人　謹白

281.04
09512g
Ⓜ

004204−000−6

281.04−O9512g

現今名家記者列伝

大屋　専五郎／著

M22

ACE−0572